

香美市における よさこい祭り 調査事業

調査担当 岡林直裕

はじめに

1954（昭和29）年、高知市でうぶ声を上げたよさこい祭りは、戦後の復興期、食うや食わずの日々を送っていた民衆を勇気づけ、市民の健康と繁栄を願い始まった。

そうした祭りの生い立ちからか、いまだに「よさこいは高知市民の祭り」と、とらえられがちだが、よさこい系の祭りやイベントが全国200カ所以上約30の国や地域に広がる中で、人知れず重要な役割を担ってきた自治体がある。香美郡土佐山田町、現在の香美市土佐山田町だ。

高知発祥のよさこいが、わずか六十余年の間に日本を代表する祭りとなっていたその契機となった二十余年前、土佐山田町は遠く離れた北の大地と交流を始めた。やがてそれは大人から子どもまで、縁もゆかりもなかった人とまちの絆をつむいでいった。

これまであまり光が当たることがなかった、よさこいの持つもう一つの側面、世代や地域、組織の枠組みを超えて、人と人とを結びつけていく不思議な力。それこそがよさこいを全国区の祭りへと押し上げた原動力となった。

さまざまな資料や文献、交流の記録、関係者らの証言などをもとに、「香美市とよさこい」の関係を交差させながら分析し、その歩みをたどっていく。

草創期からのYOSAKOIソーラン祭りとのかかわり、北海道・積丹町との姉妹都市交流の軌跡、相前後し「よさこいプロジェクト」をそれぞれ始動させる2校の取り組み…。過去から現在、そして未来へ—よさこいとのかかわりをひも解き、展望する。

目次

- ・ 香美市とよさこいの関係（概要） (P4)
- ・ よさこい草創期 龍河洞が弥生神楽 (P6)
- ・ ソーラン・積丹との交流の軌跡 (P8)
- ・ 「よさこいの原点」後世に (P24)
- ・ 山田高 よさこいプロジェクト「ゼロ年度」 (P27)
- ・ 楠目小 よさこい祭り参加目指す (P33)
- ・ 「フラフ」とよさこい/よさこい衣装 (P37)
- ・ よさこいの「聖地」やまもも工房 (P48)
- ・ 踊り子 カメラで追う！ (P50)
- ・ 再開！北と南の児童間交流/
よさこいと香美市の子どもたち (P53)
- ・ 香美市とよさこい（年表） (P60)

香美市とよさこいの関係（概要）

以下、香美市とよさこいの関係（概要）を時系列的にまとめた。詳細は香美市とよさこい（年表）を参照

◆1954（昭和29）年＝第1回よさこい祭り
よさこい祭り始まる

1町5村合併し土佐山田町誕生

◆1955（昭和30）年＝第2回よさこい祭り
踊り子倍増 山田町組参加

桜井健児さん（土佐山田町出身）司会で諸芸大会

◆1959（昭和34）年＝第6回よさこい祭り
南国土佐を後にしてがヒット

龍河洞保存会が弥生神楽

◆1972（昭和47）年＝第19回よさこい祭り
繁藤で山崩れ

初の海外二ース・カーニバル出演

◆1992（平成4）年＝第39回よさこい祭り
YOSAKOIソーラン祭り始まる

土佐山田町がソーラン祭り企画の学生ら受け入れ
学生らがよさこい祭りで初めて演舞

土佐山田と積丹両町が交流へ

◆1993（平成5）年＝第40回よさこい祭り
第2回YOSAKOIソーラン祭りに土佐山田町初参加

平山小に雪だるま 積丹町の余別小と交流

◆1995（平成7）年＝第42回よさこい祭り
阪神淡路大震災

YOSAKOIソーラン祭りに土佐山田・積丹合同チー
ム

香美市とよさこいの関係（概要）

◆ 1996（平成8）年＝第43回よさこい祭り
平山小と余別小相互訪問

◆ 1997（平成9）年＝第44回よさこい祭り
平山・余別2小姉妹校に
刃物まつりで積丹町と経済交流

◆ 2002（平成14）年＝第49回よさこい祭り
土佐山田町 積丹町と姉妹都市提携

◆ 2005（平成17）年＝第52回よさこい祭り
平山小休校、余別小との交流途絶える

◆ 2006（平成18）年＝第53回よさこい祭り
3町村合併し香美市誕生

◆ 2011（平成23）年＝第58回よさこい祭り
東日本大震災発生
香美市・積丹町姉妹都市10年 災害応援協定

◆ 2015（平成27）年＝第62回よさこい祭り
香美市が積丹町との児童交流再開

◆ 2019（令和元）年＝第66回よさこい祭り
楠目小がよさこいプロジェクト
山田高はフラフの衣装で前夜祭演舞

◆ 2020（令和2）年＝第67回よさこい祭り（予定）
新型コロナウイルス猛威
山田高新学科でよさこい探究へ

よさこい草創期 龍河洞が弥生神楽

全身赤銅色、新作踊り

第1回よさこい祭りは、踊り子不足から県内各地の伝統芸能と競演するかたちで始まった。その後しばらくは、よさこい鳴子踊りを普及・定着させていく時代が続く。歌詞と曲は、武政英策さん、振り付けは日本舞踊5流派の師匠がつくった正調よさこい調を踊り、楽しむというものだった。

変化の兆しが見え始めるのは1959（昭和34）年の第6回大会あたりから。

ちょうどその年は、高知出身者の鯨部隊の兵士が戦地で口ずさんでいたとされる歌、「南国土佐を後にして」が大ヒット。武政さんが手掛け、ペギー葉山さんが歌ったことで、高知で映画口ケも行われ、前夜祭にはペギーさんが登場、人気を集めた。

その中で、観客の度肝を抜いたのが、龍河洞保存会による「龍河洞弥生神楽」。

「よさこい祭り20年史」（よさこい祭振興会）によると、「ことしは新作歓迎ということで、鳴子踊りも新しいのがいくつか出た」とあり、「変わったところでは特別参加した龍河洞の弥生神楽」と、写真入りで大きく取り上げられている。

「男は半裸、女はすねまでの黒っぽい上衣をひっかけただけで、ともに全身赤銅色に塗りつぶしての異様な踊り。両手にもった6尺の竹をうち鳴らし、太古の踊りか」と、こと細かく表現されていて「リズムは武政英策氏、振り付けは某高校の先生によることしにはいつての新作」と、それまでのよさこい祭りにはなかった、新風を吹き込むユニークな踊りとして注目されている。

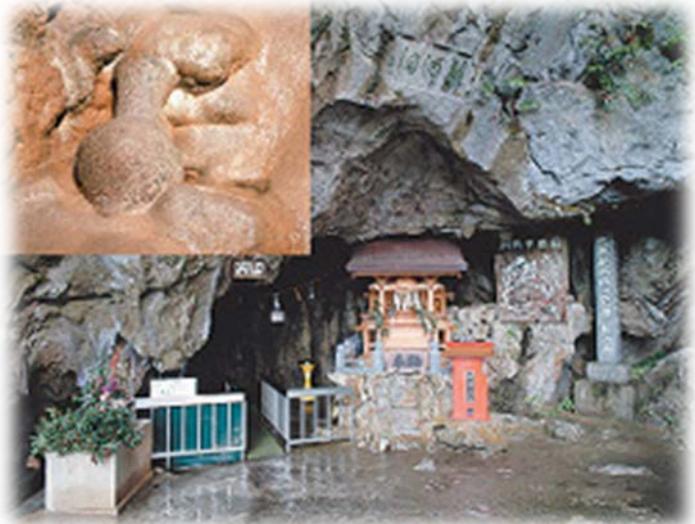


「よさこい祭り20年史」より

よさこい草創期 龍河洞が弥生神楽

香美市土佐山田町の龍河洞 = 写真参照 = は、日本3大鍾乳洞の一つで、洞内から弥生式土器、炉跡、木炭、獣骨などが発見されていて、全国でも数少ない、弥生人が居住した痕跡が残るものとして、国の天然記念物および国の史跡に指定されている。

洞内には弥生式土器が鍾乳石と一体化したものが見られ、「神の壺」と呼ばれている。今も昔も変わることなく龍河洞は、本県の貴重な観光資源の一つとなっている。



よさこい生みの親・武政さんが

第6回よさこい祭りで披露された龍河洞弥生神楽は、龍河洞の弥生人をモチーフにしたとされ、浴衣や法被で鳴子を手に踊るチームが主流だった、祭り草創期に「特別参加」とは言え、龍河洞弥生神楽は、そのいでたちを含め、耳目を集めたことだろう。

加えて、注目すべきは、その踊りの曲？リズムは、よさこい鳴子踊りの生みの親とされる、武政英策さんが担当しているという点だ。

武政さんのはのちに、「郷土芸能は民衆の心の躍動一要は、民衆の心に受け入れられるかどうかが問題で、よさこい鳴子踊りにしても、時代や人によって変わってきたし、これからどんなに変わっていてもかまわないと思っている」と語っている。その言葉通り、龍河洞弥生神楽は、よさこいの生みの親自らが、遊び心たっぷりに、これからの祭りの方向性を示したものであったのかも知れない。

一方、このころから道路の使用・規制などをめぐり、警察当局から、踊りの規模縮小を促されるようになるが、それに踊り子たちは反発、よさこいは、より多様に、自由で、エネルギーッシュな祭りへと脱皮し始めていくことになる。

ソーラン・積丹との交流の軌跡 県北海道事務所動く

起因は札幌から

香美市土佐山田町とよさこいの関係がより深いものへと変わったていったのは、1992（平成4）年札幌でYOSAKOIソーラン祭りが始まったことに起因する。

その年の6月、YOSAKOIソーラン祭りを企画した北海道大学の学生ら実行委員会のメンバーは、高知で開催される、よさこい祭りへの参加を切望する。

すでに高知では、よさこい祭りの準備が進んでおり、100人を超える学生たちを受け入れてくれる先もなく、学生らにはそのつてもなかった。

学生たちのために動いたのが、第1回YOSAKOIソーラン祭りの開催に尽力し、「後見人」として祭りの成功に寄与した、高知県北海道事務所の職員たちだった。

そのころ、県北海道事務所は、札幌市役所のすぐ近くのビルの一角にあった。そこから、学生らの受け入れ先を手配、北海道と高知の縁をつなぐために汗を流した。

2人のキーパーソン

キーパーソンとなったのは同事務所の所長・山崎栄三さんと事務所職員だった岡林秀典さん（土佐山田町出身）の2人。

ともに県職員として、YOSAKOIソーラン祭りの企画段階から、学生たちにアドバイス。祭りの開催に二の足を踏んでいた北海道庁を説得、マスコミや本県関係者らを巻き込んでいく学生の指南役としての役割も果たした。

土佐山田町で鳴子の販売などを手掛けていた「やまもも工房」の公文善次郎さん（元県職員）に、学生たちのためにと、鳴子の手配を頼んだのも山崎さんらだった。



やまもも工房が考案した花鳴子

ソーラン・積丹との交流の軌跡 県北海道事務所動く

高知との縁を...

県北海道事務所の元所長、山崎栄三さんは、1992（平成4）年6月、札幌でYOSAKOIソーラン祭りが開催された当時のことを振り返り、こう切り出した。

「あのとき、北海道・高知の両知事らの鼎談もあって、当時の県知事・橋本大二郎さんに『このご縁を、きれいにつないでいってほしいものですね。学生たちを大事にしてあげてください』と言われました」

そこで、山崎さんは考えた。

「来年もソーランをやるのは当然やけど、もっと学生に活躍の場を与えられないか。そのためにも高知に縁をつくらんといかん」

よさこい祭りに、学生たちを参加させてあげることはできないか、8月のよさこい本番まで2カ月足らず、知己を頼りにあちこち電話をした。

最初は、受話器の向こうでみんな喜んだ。宿泊して金を落とすしてくれると思ったからだ。 「いやいや、学生が行くんやから、金を落とすことにはならない。できるだけ安く受け入れてやってほしい。その代わりに、学生たちは、地域にいろんなことができるし、踊りも紹介できるから」。反応は鈍く、空振りばかりだった。

「このままでは...」。時間だけが過ぎていった。



元県北海道事務所長の山崎栄三さん

ソーラン・積丹との交流の軌跡 県北海道事務所動く

出身地・土佐山田に望み託す

県北海道事務所のもう一人のキーパーソン、岡林秀典さん（土佐山田町出身）も動いた。

だが、学生を受け入れてくれそうな自治体はなかなか見つからない。北海道に赴任する前、県南国土木事務所で勤務していた岡林さんは、そこで臨時職員として働いていた女性が、土佐山田町の職員に採用されたことを思い出しす。「ひょっとしたら...」。いちるの望みを託し、出身地の土佐山田町に電話をした。

役場職員の女性は、窓口になってくれそうな企画部署の職員につないだ。それが、後々、北海道と土佐山田町の交流の軸となり奔走することになる濱田賢二さんだった。

「YOSAKOIソーラン祭りの実行委員会のメンバーはみんな裏方で、ソーラン祭りでも踊ってないんですよ。だから、発祥の地高知のよさこい祭りで踊ってみたい、参加したいーそうした思いを学生から聞いていました。何とかならないものか、そう思っていました」と岡林さん。

土佐山田町から県北海道事務所に届いた返事は「前向きに検討する」。岡林さんらは胸をなでおろした。そこからは、ファクスで頻りに濱田さんとのやりとりを繰り返した。町内の公共施設が借りれば、100人を超える踊り子が、学生が、無料で泊まれるかもしれない...



元県北海道事務所の岡林秀典さん

ソーラン・積丹との交流の軌跡 県北海道事務所動く

積丹町との縁、きっかけは土佐赤牛？

北海道の学生がよさこい祭りに参加し、土佐山田町で泊まるだけでは弱い。それだけで、高知との縁を結ぶことになっていくのだろうか。

県北海道事務所の山崎栄三さんらは、土佐山田町との詰めの作業をする一方、著名な文化人類学者で、YOSAKOIソーラン祭りの学生実行委員会の後ろだてになってもらった、東京大学の伊藤亜人さん、高知・北海道の両知事を招いての学生フォーラムに参画した高知出身の東大生・川竹大輔さんらにも声をかけた。

せっきやく、学生が土佐山田に行くんだから、土佐山田を外から見た意見を、話し合う場を持ってないか。

「なんか、ちょっとした工夫がほしかったんですよ。そしたら、その時に積丹町の職員が、北海道から何か物産も持っていきましょうか、ということになりまして」と山崎さん。



一方、同事務所職員だった岡林秀典さんは、全く違った経緯で少し前から積丹町とやりとりをしていたという。

岡林さんは、県庁の畜産課から「土佐赤牛の生産量が少ないので、頭数を増やしたい。北海道は酪農が多いので赤牛を導入してくれる可能性がある地域はないか当たってほしい」という依頼を受けていた。

北海道事務所は、高知の物産の前線基地。本庁から相談があれば、直ちに動く。

岡林さんが、その候補地のひとつとして考えていたのが積丹町だった。

ソーラン・積丹との交流の軌跡 県北海道事務所動く

「ソーラン節発祥の地だから」は後づけ？

「土佐赤牛の飼育を」－。県北海道事務所の岡林秀典さんは、県庁本庁から依頼された趣旨を、積丹町に伝えた。しかし、町担当者からはよりよい返事は得られなかった。代わりに、ある相談を持ちかけられた。

「積丹の人口減少に歯止めがかからない。どこかに交流してもらえるような自治体はありませんか」

ひよっとすると点と点がつながるかも知れない。岡林さんは、北大生らの受け入れ場所として浮上していた、出身地の土佐山田町との交流を模索してみようと思いたった。

よさこい鳴子踊りに、よさこい節の一節が入っているように、YOSAKOIソーランの踊りには「ヤーレン、ソーランの節回しでお馴染みの北海道の民謡、ソーラン節が挿入されている。積丹町は、そのソーラン節発祥の地でもある。北と南の町が「よさこい」を通じて交流を始めるきっかけとしては、格好の町とも言える。

ところが、岡林さんは意外なことを明かしてくれた。

「実は、その話は後づけの話なんです。当時は2つの町が交流する理由がこれとって見当たらなかった。で、積丹はソーラン節発祥の地なので、よさこい祭りやYOSAKOIソーラン祭りとの関係を深めることにもつながっていく、そういう話を後からくっつける格好になったんです」

そうした一方で、土佐山田町に対する積丹町の反応や動きは、縁結び役を果たした県北海道事務所の職員が驚くほど前向きで友好的なものだった。

「正直、びっくりしました。積丹があれほど熱心に、積極的に、動いてくれるとは思っていませんでした。きっと、このままだと人口がどんどん減っていき、町がなくなるかもしれないという強い危機感があったんだろうと思います」

札幌から陸路、車で2時間ちょっと。岡林さんらは積丹町まで行き来するようになった。

ソーラン・積丹との交流の軌跡 県北海道事務所動く

よくぞ難しい仕事受けてくれた

第1回YOSAKOIソーラン祭りが成功裏に幕を閉じた1992（平成4）年夏、学生実行委員会のメンバーら120人は、宿泊先の土佐山田町に入った。念願のよさこい発祥の地で演舞を披露するためだった。

県北海道事務所長だった山崎栄三さんは「私らから見ると、あの時の実質的な責任者は、土佐山田役場の濱田賢二さんやった。ただで学生を泊めてくれたり、さぞかし苦労されたことでしょう。よくぞ難しい仕事を受けてくれたと思います」と労をねぎらい、「でもだからこそ、そこからいろんなことが始まり、人の輪が広がっていったんでしょね」という。

土佐山田町に宿泊した学生一行には、北海道・積丹町の役場職員2人も同行。その後、2つの町は、合同チームをつくってYOSAKOIソーラン祭りに参加、土佐山田まつり・刃物まつり、積丹の味覚まつりなど、それぞれの祭りやイベントを通じ、住民がそれぞれの町を互いに訪問する息の長い交流へと発展していくことになる。



香美市土佐山田町の刃物まつりには毎年、積丹町ののぼり旗が並んでいる

ソーラン・積丹との交流の軌跡 県北海道事務所動く

よさこい・ソーラン祭りあればこそ

橋渡し役となった、県北海道事務所職員だった岡林秀典さんは「そんなに深い思いがあったわけじゃなくて、ただ、つないだだけ。最初はえらい、おおごとになっていきゆうという感じでした。でも、あのときの縁が今もつながっていると聞くと、やっぱりうれしいですね」と話す。

「よさこい祭りやYOSAKOIソーラン祭りがなかったら両町の交流はどうなっていたのか」との問いかけには、「何も始まらなかったでしょうね。あの祭りがあったからこそ、交流が始まったんだと思います」と即答した。

同事務所所長だった山崎栄三さんも「よさこいがあって、ソーラン祭りができた。それで、学生たちが、積丹町が、土佐山田町にも行くことになった。要はそれをどう体系化していくか。そこに一つの串をどう通すか。その役割を果たしてくれたのが、よさこい祭りとソーラン祭りだったんだと思います」と強調する。



北海道を代表する祭りのひとつとなったYOSAKOI
ソーラン祭りと祭りが繰り広げられる札幌市中心部

ソーラン・積丹との交流の軌跡 県北海道事務所動く

人と人をつなぐ、しぼりのない祭り

「やっぱり、面白がってやらないと事は進まない」
「私たちからすると、人はどう動き、人と人が集まったら、どういう化学反応を起こすか。池にぽちんと石を投げてみる。それでどれだけの人を巻き込んでいけるのかということを実証したかった」

山崎栄三さんと岡林秀典さんは、こう話しながら、当時の県北海道事務所の果たした役割を改めて振り返る。

すべてのキーワードとなったのは「人と人とのつながり」。物品のつながりでもなく、観光客としてのつながりでもない。人と人が主で、それがあって物を売ったり、いろんなことができる。「人と人とを直結させていく—そんな力が当時のよさこいにはあった」。2人の話はよさこい論へと発展していく。

普通、祭りというのは、先祖祭りや怨念の鎮魂、宗教的なもの、祈りがあったりするが、よさこいは、それとはかけ離れた、市民ための祭りというところからきている。そこがほかの祭りとは全然違う。だから、自由な発想で、それこそ自由に全国どこでもできる。よさこいには、「しぼり」がない。よく踊りや音楽にしぼりがなく自由だと言われるが、2人は「祭りの概念そのものにしぼりがない」と考える。

だから、産業振興であったり観光振興であったり、いろんな側面にとらえられる。あらゆる分野からとらえることができる総合体。街そのものが舞台になる—そうしたところがよさこいにあると。

熱い心を持った人がいて、その縁をよさこいというものが不思議とつないでいく。最初、土佐山田を訪れた積丹の役場職員は「こんなに歓待してもらって」と感激していた。だから土佐山田から積丹に来てくれた時には、そのお返しをする。その繰り返しが両町の交流を深めていった。山崎さんと岡林さんは、そう結んだ。



よさこいは、祭りの概念そのものにしぼりがないと話す岡林秀典さんと山崎栄三さん

ソーラン・積丹との交流の軌跡

川竹大輔さん

学生の視点から...

1992（平成4）年夏、第1回YOSAKOIソーラン祭りに唯一高知出身の学生として直接かかわった、川竹大輔さんは、ひと足早く土佐山田町に入り、あとから来た北海道の学生実行員会のメンバーらと合流、同町の将来について学生の視点から提言などを行った。

当時、川竹さんは、同町役場の職員だった濱田賢二さんの案内で町内を巡りヒヤリングをした。

「STEP UPという地域おこしグループがあって、外からの目線で意見を聞きたいということでした。ソーランの学生と一緒に来たということで、とてもかわいがっていただいたという記憶があります。それまで大学生が町議会で話をさせてもらえるようなことは、ほかではまずなかったのです」

川竹さんは当時、同町の日曜市で、学生や積丹町の職員らと、北海道の物産を販売するなどの活動も行った。

現在は勤務する高知大学で講座を開くなど、国内外に広がったよさこいについて独自の視点で研究を続けている。川竹さんの目に、あのころの土佐山田町と積丹町との関係はどのように映ったのだろうか。



第1回YOSAKOIソーラン祭りに高知出身の学生としてかかわった川竹大輔さん

ソーラン・積丹との交流の軌跡

川竹大輔さん

中味が伴った交流

川竹大輔さんは「土佐山田と積丹両町のように、姉妹都市提携をして交流をする方法は、戦後、各地域で盛んに行われてきましたが、ともすれば、役場同士の交流に陥りがちなんですよね」といい、「それが、土佐山田町（香美市）と積丹町の場合は、住民も巻き込んだ、中味が伴った交流になっていった。よさこいを通じた交流があるということが、市民も入った交流になり、役場の職員が住民と一緒にやっていくきっかけのひとつになったのではないのでしょうか」とみる。

さらに話題は、行政の仕事の仕方へと広がっていく。「自治体の規模が小さくなればなるほど、国や県からどうお金を引き出すかということが大事になってくる。私たちの町ではこれだけのものが足りません、こんなことに困っています。だから支援をとなり、補助金などの助成を受ける」。ところが、よさこいでは、そういった仕事のやり方とは、まったく違ったロジックが必要になってくる、発想の転換が求められるーと川竹さんは言う。

よさこいのすすめ

誰もが参加できる「よさこい」というものを通して、ポジティブにみんなでできることを探していく。それにかかわる行政も受け身ではなく、前向きに、やる気のある人を発掘し、地域を引っ張っていける人材を見つけていく。

「そういう意味でも、さまざまな地域で、よさこいをやっていくというのは意義があるのではないのでしょうか」。自らの体験も踏まえ、川竹さんはそう提言する。

さらに、学校など教育面での取り組みについては「全国に広がっていることが、今のよさこいの価値のひとつだとするならば」と前置きし、北海道などで、よさこいを学びの一環として取り入れて教育効果を高めている高校があることに言及。

「今はネットを活用することもできますし、もっと、外からよさこいがどう見られているのか、子どもたちがそれを体感しながらやっていくことも必要なのでは」と提案した。

ソーラン・積丹との交流の軌跡

濱田賢二さん

ひよんなところから...

毎年10月、香美市内で開かれている刃物まつり。会場の一角に設けられた積丹町のブースで、穏やかなの笑みを浮かべる初老の男性がいた。

「もともと、根も葉もないところからですよ。何のつながりもない、たまたま、ひよんなところから始まっていったんです」

県北海道事務所、香美市、積丹町、YOSAKOIソーラン祭りに携わった学生ら、誰に尋ねても、ほぼ例外なく、この男性の名前が挙がる。

濱田賢二さん。一連の「北と南の交流」の起点となった1992（平成4）年、土佐山田町の役場職員として北海道の学生らの受け入れに携わって以来、公私ともに、その交流を支え続けてきた「立役者」のひとりだ。

濱田さんが言う「ひよんなところから始まったという交流」は、今も続くYOSAKOIの合同チームを生み出し、大人も子どもも互いの町を訪問し合い、縁もゆかりもなかった2つの町を姉妹都市として結びつけていった。ここからは、交流の軌跡を、土佐山田町側の視点から改めてたどってみる。



香美市内で開かれている刃物まつり。積丹町のブースには北と南の交流の立役者のひとり、濱田賢二さんの姿が

ソーラン・積丹との交流の軌跡

濱田賢二さん

札幌からの依頼

北海道の学生実行委員会による第1回YOSAKOIソーラン祭りが成功裏に幕を閉じた1992（平成4）年6月。土佐山田町役場に一本の電話がかかってきた。札幌にある県北海道事務所からだった。

電話主は、同事務所の岡林秀典さん（土佐山田町出身）。電話を受けたのは岡林さんと旧知の総務課の役場職員だった

このころ土佐山田町では、地域おこしグループ塾「STEP UP」が創設され、その事務局を役場の企画管理課が務めていた。

岡林さんから話を聞いた総務課の職員は、交流の窓口になれるとしたら...と考えて企画管理課に相談した。

依頼の要件は、8月のよさこい祭りに参加する100人を超える北海道などの学生を、町内で受け入れてほしいというものだった。

相談を受けた企画管理課の濱田賢二さんは、上司に説明した上で、ひとまず、当時の町田守正町長に報告・相談することにした。

「実は、当時の町田町長は、日ごろから住民の福祉を追求していくのが行政の使命だと考えておられていて、あまりにぎにぎしいことは...という感じの方でした」

実際、濱田さんも一職員として、そうした話をよく聞いていたといい、「おそらく、お断りしなさい」という回答が返ってくる。内心そう考えていた。

ところが、意外に、も町長の反応は「それはなんとか対応してみてもどうですか」というものだった。

「まさか、と思いましたね。日ごろの言動からそんな答えが返ってくるとは考えられなくて」。しかも、よさこい祭りまであと2カ月もない段階で100人を超える学生を受け入れてくれるところがあるだろうか。

濱田さんは、予想外の反応に驚きながらも、町長の思いを受け止め、受け入れる可能性を検討しなければと、町内の公的施設を当たってみることにした。

ソーラン・積丹との交流の軌跡

濱田賢二さん

北海道の学生受け入れ

「仮に学生たちが、よさこい祭りに参加できることになっても、泊まる場所がなければどうしようもない。一番大事なことは、どこで泊まるか、泊まり先を確保するということでした」と濱田賢二さん。

例年、高知市内では、よさこい祭りの準備が進み、民間の宿泊施設は、県外から訪れる踊り子や観光客でいっぱい。仮に空いているホテルや旅館などがあったとしても、学生が泊まるには宿泊料が高額で、支払えない。

無料で100人を超える学生たちを受け入れるとなると...濱田さんは、県北海道事務所などとの連絡調整をするとともに、町内での宿探しに奔走。

具体的な学生らの受け入れについては、地域おこしグループ塾「STEP UP」に相談し、受け皿となり対応してもらえよう頼んだ。

その後、曲折がありながらも、中央公民館や福祉センターなどを宿泊先として確保、土佐山田町は学生らを受け入れることになった。

8月7日、北海道・積丹町の役場職員を含む総勢120人の学生らが土佐山田町を訪れた。

文化人類学者の伊藤亜人さん、東大の学生だった川竹大輔さんも同町入り。町議会の議場を会場に「土佐山田21世紀会議」が開催され、フォーラム形式で、北海道の学生らからの提言を聞いた。

学生らは、北海道代表YOSAKOIソーランチームとして初めてよさこい祭りに参加、特別賞を受賞した。祭り期間中は、高知市の銭湯を利用、夜は土佐山田町内の公共施設に宿泊することに。

土佐山田町 ソーラン祭りへ

当時、こんなエピソードがあったという。

町内で開かれた懇親会—地元の地域おこし団体、県北海道事務所、北海道の学生や積丹町の関係者らも顔を出し和やかに歓談。宴席のあいさつで、門脇槇夫さん（のちの初代香美市長）がある言葉を発した。

「来年は北海道に踊りにいくぞー」。その一言がきっかけとなり、翌年の第2回YOSAKOIソーラン祭りに、土佐山田町はチームをつくって初めて参加することになった。

ソーラン・積丹との交流の軌跡

濱田賢二さん

土佐山田・積丹合同チーム

1993（平成5）年6月、第2回YOSAKOIソーラン祭りに参加した土佐山田町は、1995（平成7）年には積丹町との合同チームを結成。その後も四半世紀、連続して出場し続けている。

その背景にあったのは、北大生だった長谷川岳さんをはじめとする、ソーラン祭り創設時からの実行委員会のメンバーらの存在、そして、歳月を重ねるにしたがい、より親密さ増していった積丹町との関係があった。土佐山田町側の交流の軸となっていた濱田賢二さんは、こんな話を教えてくれた。



第2回からソーラン祭りに参加。積丹町との合同チーム

姉妹校提携

学生らが土佐山田町を初めて訪れたとき、濱田さんは同行していた積丹町役場の職員2人と意気投合。町内視察と称して、町の北部にある平山小学校に案内した。

「平山小は当時、珍しい木造校舎で。積丹って海辺の町じゃないですか。里山というか、山の学校を見てもらえたらなあと思って、見てもらったんですよ。そしたら、すごく気に入られて」

すると翌年、平山小に、積丹町の「町に明かりを灯す会」から雪だるまが届き、児童らは驚かせる。

「確か、最初に北海道に行った第2回のYOSAKOIソーラン祭りの時でした。北と南では文化も違うはず。山の子は外へ出る機会がないから。そう思って積丹に連れて行きました」と濱田さん。

こうしたことがきっかけで、両町の交流は、子どもたちも巻き込んだ交流へと発展。平山小と積丹町の余別小の相互訪問がスタートし、1997年（平成9）年には姉妹校として提携する。そして、両校の交流は平山小が休校になるまで続いた。

ソーラン・積丹との交流の軌跡

濱田賢二さん

香美市誕生、引き継がれる交流

土佐山田町と積丹町の交流は2002（平成14）年、姉妹都市提携というかたちで結実。2006（平成18）年に、物部川流域の香北町・土佐山田町・物部村の3町村が合併し、香美市が誕生してからも、途絶えることなく続いている。

濱田賢二さんによると、YOSAKOIソーラン祭りと土佐山田まつりがひとつのセット、積丹ソーラン味覚まつりと刃物まつりがもうひとつのセットになっているという。「それぞれ積丹からのメンバーも入れ替えて、来ていただいています。最近では、刃物まつりにおいでになるメンバーも膨らんできていて」

「そこに関わる人たちの熱い思いがあって、それぞれのタイミングのときに思いのある人たちが、自分の持っているものを出してください。気持ちだけでも動いていかなのでしょけれど、そこにはさまざまなものがあって、縦横につながる人の糸のようなものがちゃんとあったというか。やっぱりすべては人、人と人との出会いだと思います」

四半世紀におよぶ北と南の交流は、濱田さんのライフワークのひとつになっているのかもしれない。



香美市で開催された刃物まつり

ソーラン・積丹との交流の軌跡

魚屋友子さん

(積丹町女性団体連絡協議会長)

踊りきっかけに

積丹町の隣町の役場職員を退職してから、積丹の婦人会に入りました。そこから香美市さんとのおつき合いが始まりました。

それからずっと、十数年、こちらに来ています。婦人会はいつも刃物まつりに、お店をださせていただいているので。濱田賢二さんや香美市の皆さんには、ほんとに仲良くしていただいて、たくさん友達ができました。香美市の方は、優しくて皆さん人柄がいいですね。

食べ物がおいしいことも、魅力のひとつですよ。ここじゃないと食べられないもの、たたきとか。街並みもきれいで大好きですし、平山にも泊まらせてもらいました。

15、6年になると思いますが、YOSAKOIソーラン祭りでも合同チームの一員として踊らせてもらっています。

よさこいやYOSAKOIソーラン、踊りをきっかけにこれほど仲良くなれるなんて、珍しいですよ。きっとどこにもないんじゃないでしょうか。



刃物まつりのために積丹町から来高した魚屋友子さん

「よさこいの原点」後世に

県日舞協会が初回の踊り

昨年夏、高知市の中央公園。第66回よさこい祭りの前夜祭が繰り広げられていた。

壇上には、前回大会の入賞チームとともに、高知県日本舞踊協会の若柳由喜満さんら、日舞の師匠らがずらりと並び、三味線と生唄で「原点のよさこい鳴子踊り」を再現した

六十余年前の第1回大会で、一度だけ披露された、いわば「幻の踊り」。歌詞と曲は、よさこい鳴子踊りの生みの親・武政英策さん、振りつけは日舞5流派の師匠が考案したとされる最初の鳴子踊りだ。

平成から令和へと時代が移り変わる中で、よさこい発祥の地として「祭りの原点を後世に伝えていこう」と、県日舞協会の全面的な協力を得て、よさこい祭振興会が開催。

そうした趣旨に沿って、今回は特別に一般の小中高校生らも踊りの輪に加わった。



第66回よさこい祭り前夜祭

「よさこいの原点」 後世に

山田高生 前夜祭で演舞

前夜祭の踊りの輪の中には、香美市土佐山田町の県立山田高校商業科の生徒たちもいた。

山田高校の生徒たちは、「原点のよさこい」を継承する若柳由喜満さんら、県日舞協会の師匠が事前に開いた踊りの講座に参加。

若柳さんらは、高知の土壌から生まれた、よさこい節と土佐のお座敷文化に根差した、よさこい祭りの原点を「ひとりでも多くの人に知ってほしい。そしてそれを、若い世代の人たちに受け継いでほしい」—そんなメッセージを受講した生徒らに伝えた。

生徒の大半はそれまで、よさこい祭りとは直接関わることはほとんどなく、踊りについても全くの素人。それでも、鳴子の持ち方、鳴らし方や、振りつけの意味を、ひとつひとつ丁寧に教える若柳さん。生徒たちは、その思いを受け止めようと、前夜祭での演舞に向け準備を始めた。



山田高生と若柳由喜満さん

「よさこいの原点」後世に

花鳴子にフラフの衣装

山田高校の生徒たちが前夜祭で使う鳴子は、香美市土佐山田町の「やまもも工房」が考案した人気商品「花鳴子」を用意してくれた。



衣裳は、地元土佐山田を代表する伝統工芸品、「フラフ」の生地を活用することにした。

同校は数年前に、地元の人から譲り受けたフラフを使いジャケットを仕立てたことがあり、それらの生地を手直しし、フラフの法被や漢服をつくることに。

迎えた8月9日。香美市の良さをアピールしようと、商業科の1、3年生は、地域の協力を得ながら、前夜祭に臨んだ（写真）。

山田高 よさこいプロジェクト「ゼロ年度」

商業科→ビジネス探究科へ

香美市土佐山田町の山田高校は、同市で唯一の県立高校で、県内では珍しい普通科と商業科を併設している高等学校。

2020年度からは、商業科を「ビジネス探究科」に改称。新設されるグローバル探究科などとともに、新たな学びをスタートさせる。

これまで同校は、同市にある高知工科大学や地元商店街・企業などの協力を得て、地域と協働した活動を展開。ショウガの一大産地である香美市の特長を生かし、商業科の生徒らが手掛けた、まんじゅう「高校三年生の山田まん」はヒット商品となり、話題を呼んだ。

こうした取り組みをさらに発展させ、将来、起業家として地域社会に貢献する人材を育成しようと、商業科をビジネス探究科に春から衣替え、前年度となる2019年度は、準備段階の「ゼロ年度」と位置づけ、試行的な取り組みを始めた。

ビジネス探究科
Business Research Course

▶特色ある取り組み
3年間で自分の「当たり前」をたくさんつくる

▶独自科目

- 1年次** 課題探究 (探究リテラシー)
「探究」を軸とした商業学習で起業家精神の基礎を育てます。
- 2年次** 課題探究 (商業探究Ⅰ)
「探究」型の商品開発で、「高校三年生の山田まん」を「学」として学びます。
- 3年次** 課題探究 (商業探究Ⅱ)
個別指導による上級資格の取得と重要な専門教科学習で地域に貢献した起業家の育成を目指します。

取り組みの例

- 「先人の挑戦や失敗、努力」から学ぶ
- 「よさこい」を学ぶ
- 「地域産業振興を目的としたCMづくり」による学ぶ

予想される進路 → 就職・学科の特性を活かした大学進学・専門学校など幅広い進路を目指します。

Challenge (挑戦する) is the norm, Think (考える) is the norm, Investigate (調べる) is the norm, Imagination x Daily (発想×日常) is the norm.

山田高 よさこいプロジェクト「ゼロ年度」

2020年度からスタートする山田高校の「ビジネス探究科」とよさこいとの関係は一。同校の正木章彦校長に話を聞いた。

起業家育成へ

そもそも、2020年度からビジネス探究科ができるということで、将来、高知県の産業を担っていけるような起業家を育成していこうと考えています。

その切り口として、商品開発とか、それから販売戦略を練ったりとか、3年間でいろんなことをやり、さまざまな能力や資質を身につけてもらう。

その切り口の中には、地場産業であったり、1次産業をはじめ、打刃物やフラフとか、いろんなものがある。そういったことをベースに、起業家の理念や考え方、その手法というものを、子どもたち自身が学んで身につけ、卒業後、この地域で、香美市で、自ら業を起こすようになればと思っています。

そうしたなかで、ビジネス探究科の2年時に取り組む、大きなテーマとして「よさこいを柱としたビジネスチャンス子どもたちでつくってみてはどうか」という流れになった。

2019年度はそれに向けた「ゼロ年度」。若柳由喜満さんらの講座や前夜祭などに参加し、そこで、よさこいのルーツや原点のよさこい鳴子踊りを、直接教わり、踊ってみることで次のステップにつなげていければと考えました。



山田高校の正木章彦校長

山田高 よさこいプロジェクト「ゼロ年度」

2020年度から山田高校が始める、「探究「よさこい」をはじめとする新たな学びについて説明を一。

キーワードは探究

従来の商業科を、ビジネス探究科（定員40人）に再編し、起業家育成を柱とした教育活動を3年間展開していきます。

1年次には「探究リテラシー」として、まず探究するとは何なのかを考える。

いろんな情報を知り、その上で課題を設定、それを分析して、課題解決の案を出してみる。次にその案を実行してみる—そういったサイクルを地元産業などをテーマにやっていく。

ビジネス探究科1期生には、キーワードとなる探究の流れを1年間かけて、しっかり身につけてもらおうと考えています。

探究の基本

身の回りをセオ? → 情報の収集 → 整理・分析 → 発想の表現 → 身の回りをセオ?

探究のサイクル

1年生 Learn!
考えることの基礎を徹底的に学びます。

2年生 Do!
日本・世界の課題やビジネスに関する課題について、1年生で身につけた「考える」ことの基本を使って取り組みます。

3年生 Challenge!
自分を取り巻く社会について、自ら課題を探して考察することに挑戦します。

探究の学び
学校始まる!!

山田高校での特色ある学び

グローバル探究科

	1年	2年	3年
探究科目	探究リテラシー	グローバル課題探究	知の探究
その他に学習する科目	必修科目を中心に徹底的に学習します。	理数専門科目や英語の専門科目など生徒の興味に合わせた専門科目を学習します。	学校独自の演習科目や研究科目で主体的な学びを行います。

ビジネス探究科

	1年	2年	3年
探究科目	探究リテラシー	起業探究I	起業探究II
その他に学習する科目	必修科目を中心に簿記などの専門基礎科目を学習します。	商品開発やCGデザインなど専門科目を多く学習します。	電子商取引やビジネス実務など実践的な専門科目を学び社会に出る力を養います。

普通科

	1年	2年	3年
探究科目	地域課題探究I	地域課題探究II	知の探究
その他に学習する科目	必修科目を中心に学習します。	文系科目を中心に生徒の興味に合わせた科目を学習します。	学校独自の演習・探究科目で主体的な学びを行います。

山田高 よさこいプロジェクト「ゼロ年度」

実際に「よさこいプロジェクト」を本格的に展開するのは「ビジネス探究科」がスタートした翌年度からとなりそうだが...

課題研究（週2時間）

1年間、課題解決能力を子どもたちが身につけた上で、2年時に「じゃあ、よさこいをテーマとしてビジネス展開するためにはどうやったらいいですか」と投げ掛ける。

そうすると、あれしよう、これしようということが出てくる。「よさこいの衣装をつくったけど、もうちょっとこんなデザインにしようとか、いやいや、それよりも、もっとほかにもビジネスとして展開するところがあるのじゃないか」とか、そういう一連のことを、子どもたち自身に考えさせます。

で、最後は3年生で、自分でテーマを設定してビジネスプランを考える。地元の産業、1次産業でもいいし、2次産業でもいいし、それから高知県をテーマにしたプロジェクトでもいい。そうしたことを考えられる子どもたちを育てていきたい。

実際には1年間やってみてということにはなりませんが、「課題探究」というカリキュラムの中で2単位（週に2時間ずつ）3年間授業を行い、起業家としての資質を育成していききたいと思います。

課題研究(2単位×3) 3学年間計画

ねらい	①「知りたいこと」を探究するマインドと主体的に学ぶ・行動する態度を形成する。 ②探究するために必要となる専門的な知識、技術及び技能を習得する。 ③歴史的起業家や日本及び諸外国の産業界の発展に寄与した多くの人物を通して、歴史的背景から商業の発展、展望を探究する。 ④歴史上、あるいは実在の起業家の生き様や失敗、成功例を学び、起業家精神を学ぶとともに、自らのビジネスアイデアを磨き行動を起こす。		
学年	1年	2年	3年
科目	探究リテラシー 【課題研究】	起業探究Ⅰ 【課題研究】	起業探究Ⅱ 【課題研究】
テーマ	地場産業から起業へ ～最初の一步～	よさこいプロジェクト ～「よさこい」ビジネスにチャレンジ～	社長プロジェクト ～起業にチャレンジ～
位置づけ	【探究の型を知り、術を身に付ける】	【探究の目を広げる】	【探究の道を知る】
目標	①論理的に読む・書く・話す(伝える)力を身に付ける。 ②探究技法(調査・社会実験・フィールドワーク・資料の見方等)、実施計画書作成力、プレゼン力を身に付ける。 ③日本を代表する起業家やバイオニア、高知県起業家のスピリッツ、挑戦と失敗、努力等を探究し、それらに通じる起業家精神を学ぶ。	「よさこい」を通して高知県のオリジナリティやアイデンティティを理解し誇りするとともに、「よさこい」文化を新たなビジネスモデルとして捉え、海外発信も視野に新ビジネスや新商品等を開発する。	具体的なビジネス場面を想定し、経済や市場の動向等マーケティングに基づいた分析考察検討を行い、地域産業の振興策やICTを活用した地域ビジネス、地域資源を活用した商品開発を展開する方策を探究し実践する。

山田高 よさこいプロジェクト「ゼロ年度」

2019年のよさこい祭り前夜祭には、商業科の3年生だけではなく、同科の1年生も参加していたがー。

体験素地にチャレンジ

8月の前夜祭や正調鳴子踊りの講座には、1、3年生30人ほどが参加させていただきました。

商業科の1年生は2020年度、ビジネス探究科の2年生になる。何かやれるのでは...と期待しています。

新2年生には、2019年度の体験を素地に、よさこいについてもチャレンジしてもらいたい。ビジネス探究科1期生を引っ張り、後々の「よさこいプロジェクト」（左表参照）へとつなげていければと思います。

課題研究Ⅱ（2単位）－ 起業探究Ⅰ 年間指導計画

講座名：起業探究Ⅰ よさこいプロジェクト ～「よさこい」ビジネスにチャレンジ～

目標：「よさこい」を通して高知県のオリジナリティやアイデンティティを理解し誇りとするとともに、「よさこい」文化を新たなビジネスモデルとして捉え、海外発信も視野に新ビジネスや新商品等を開発する。

回	実施時期	内容
1	4月	オリエンテーション
2		【講演】なぜ、今「よさこい」なのか。「よさこい」の価値を知る。
3		(1)「よさこい」の①歴史、②広がり、③変容、④国際化、⑤ビジネスについて課題や展望を探究する。
4	5月	○よさこい祭りの誕生（曲・歌詞、踊り、鳴子）、YOSAKOIソーラン、スーパーよさこい
5		○①～⑤のテーマでチーム分け
6		○①～⑤に関わる専門家による講話、専門家へのヒアリング、課題の洗い出し、展望まとめ
7	6月	○クラスでチーム発表し共有
8		○全体のまとめ、これからの方向性をクラスで決定
9		(2)「よさこい」の経済効果を生かした観光企画書を作成
10	7月	○【講演】観光と「よさこい」
11		○よさこい祭りについて経済効果、観光という視点からリサーチ
		○対象①参加者、②観光、③関連企業、④マスコミでチーム分けし調査内容・実施方法の検討
		【夏季休業】 ①よさこい祭り調査 ②よさこい祭り体験
12	8月	○調査結果のまとめ、観光企画書作成
13	9月	○観光企画書作成
14		○クラスでチーム発表し共有
15		○高知県地方創生アイデアコンテストに応募
16		(3)前期の振り返り
17	10月	(4)「よさこい」ビジネスプロジェクト
18		○【講演】起業家が語る「よさこい」ビジネス
19		○前期取組をもとに、チームごとにビジネステーマ・実施計画を決定
20	11月	○ビジネステーマごとに専門家や企業等へヒアリング
21		○ビジネスプランの検討
22		○ビジネスプラン企画書作成
23		○協働事業者等の選定検討
24	12月	○ビジネスプランの磨き上げ
25		
26	1月	○ビジネスプランの実現化に向けた検討
27		○よさこいビジネスプランの発表、インターネット発信
28	2月	(5)1年間の振り返りと評価
29		
30		●次年度「起業探究Ⅱ」の準備
31		

休日等を活用してリサーチ活動

山田高 よさこいプロジェクト「ゼロ年度」

鳴子づくり体験

2019年末、香美市土佐山田町の「やまもも工房」へ。山田高校商業科の生徒らが訪れ、鳴子づくりの体験をしていた（写真）。

生徒らは鳴子づくり体験に先駆け、同工房のよさこいグッズなどを街頭で販売する実習なども行った。いずれも、新学科の学びに向けた、よさこいプロジェクト「ゼロ年度」の取り組みの一環だ。

また、11月には、同市の楠目小学校で行われた公開授業で、生徒たちが一連の活動を発表。よさこいの学習に取り組む小学生にアドバイスをし、エールを送った。



楠目小 よさこい祭り参加目指す

公開授業

2019年11月、香美市土佐山田町の楠目小学校の3年生の教室。「総合的な学習の時間」の公開授業が行われた（写真）。

教壇には、担任の先生とともに、よさこい祭りの前夜祭に「フラフ」の衣装をまとい踊った、山田高校商業科の生徒たちがいた。

楠目小3年生は1学期、「香美市のよさ」を考える学習の中で、校区にあるフラフ工場などの町探検や、高知市内で観光客らに、香美市や高知県の印象を直接、尋ねるアンケート活動などを行った。

香美市の知名度は予想以上に低かったのに対し「よさこい」の知名度は抜群だった。

子どもたちは、来夏のよさこい祭りに出場し、香美市の魅力をアピールすることを目標に掲げた。

そうした中で、前夜祭に出場した山田高生と交流、この日の公開授業に臨んだ。



楠目小 よさこい祭り参加目指す

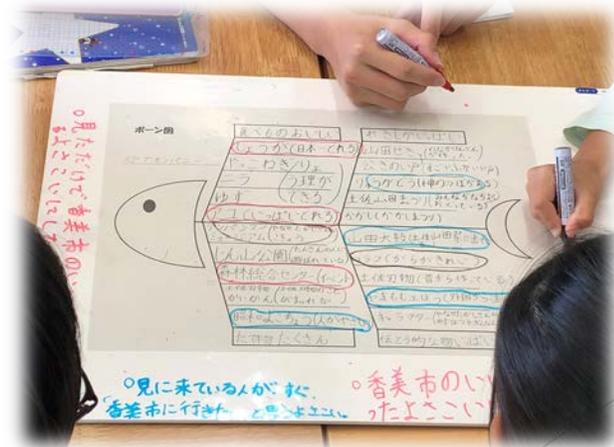
香美市のよさを広めたい

香美市土佐山田町の楠目小学校は、同小3年生が香美市のよさを広めるため、来夏のよさこい祭りへの参加を目指す活動を「よっちょれ！よさこいプロジェクト」と名づけ、保護者や地域の協力を得ながら、始動編→激動編→発動編と、ステップアップした教育活動を展望する。

このうち始動編は「香美市のよさを伝える」「町探索に出かけ、香美市のよさを知る」「高知市内で観光客にアンケートを行う」。

激動編は「香美市のよさを広めるために、よさこい祭りに出場し何を広めたいのかを考える」「よさこい祭りに出場するために必要なことを考え、チームの発起人の方にアドバイスをもらう」「山田太鼓などと曲や踊り、鳴子などの打ち合わせをする」。

11月の公開授業では、前夜祭に出場した山田高生の話も聞きながら、香美市の魅力を発信し届けるには、どうすればいいか、子どもたちなりに考えた（写真）。



楠目小 よさこい祭り参加目指す

香美市土佐山田町の楠目小学校の野村貴子校長は、3年生がよさこい祭りに参加することを目指すようになった背景について、こんな話をしてくれた。

香美市ってどこ？

3年生は、地域や身近な社会のことなどを探究する「総合的な学習の時間」が始まる学年に当たります。

それです、校区にどんな素敵なおところがあるのか、いろんなところに行き始めたんです。山田太鼓さんやフラフの工場とかがあって、子どもたちは「わあ、すごい」と目を輝かせて帰ってきたんです。

それで、今度は高知市のアーケード街をずっと歩いてインタビューを試してみたいです。

「香美市のこと知ってますか？」と。するとほとんど知らなくて「香美市ってどこ？」って言われて。観光客の方が多かったのかもしれませんが、まだ土佐山田と言った方が分かったみたいで...

でも「よさこいは？」って聞くと、県外の方も含め100%の方が知っていたんです。で、子どもたちは「香美市のこと知らんのに、よさこいやったらみんなが知っちゃう」。せっかく高知市まで行ったのに...そんなことを感じながら学校に戻ってきました。



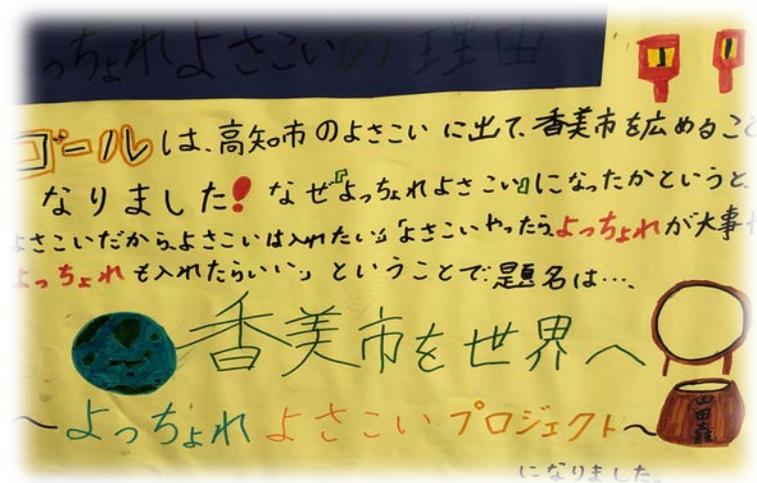
楠目小 よさこい祭り参加目指す

夢を叶えてあげたい

「山田太鼓さんや、フラフの染工場さん、鳴子をつくっている、やまもも工房さん…。香美市にはよさこいを支えている人たちがいっぱいいる。そのことに気づいた子どもたちは、今度はよさこい祭りに出たい、お祭りに出て香美市をアピールしたいと思うようになってきたんです」

楠目小学校の野村貴子校長は、これまでの経緯を説明し、子どもたちの学習の一環として、よさこいに取り組む考えを強調。これからの活動について、こう展望した。

「ここまでするまでには紆余曲折がありましたが、そんな中でも、子どもたちは子どもたちなりに必死になって取り組んでいます。保護者の皆さんや地域の方の協力で、衣装などをつくるためのフラフもたくさん集まり、募金活動も続けています。よさこいに出て踊りたい。目をキラキラさせて話す子どもたちの夢を何とか叶えてあげたいと思っています」



「フラフ」とよさこい 物部川の恵み生かして

県内には、男の子の健やかな成長を願い、端午の節句に、こいのぼりとともに「フラフ」と呼ばれる大旗を揚げる風習がある。

男児誕生の祝いとして、親族から家紋や名前を入れたフラフが贈られ、近所の人々が手伝って柱を立てる。節句には「おきゃく」をして皆で祝い、酒を飲むのが慣わしだったという。

五月晴れの空に鮮やかなフラフがはためく光景は、南国土佐の勇壮な原風景として知られているが、もともとは、旗を意味するオランダ語の「VLAG」または英語の「FLAG」（フラッグ）が語源となったなど、諸説がある。

主に高知市から東部の香長平野などでよく見られ、県西部などでは（縦）のぼりの様式が多いとされる。

香美市土佐山田町周辺では、古くから物部川の恵みを生かした染物が盛んで、最盛期には紺屋や十数軒の染物屋が軒を並べていたという。



香美市土佐山田町の楠目小学校の校舎に飾られたフラフ

「フラフ」とよさこい 旗振り講習会も

土佐の伝統工芸品である「フラフ」は、よさこいとも深いつながりがある。

フラフやのぼりをチーム旗などとして使用する踊り子隊が、県内外で急増。隊列の先頭や後方で、粋で、優雅に、豪快に、フラフやのぼり旗を振る姿は、全国のよさこい系の祭りでは定番化し、毎年よさこい祭りでは、上町よさこい鳴子連などの演舞が注目を集めている。

草創期のYOSAKOIソーラン祭りでも旧土佐山田町から参加した門脇楨夫さん（初代香美市長）がフラフを振り、演舞を盛り上げたとされる。

フラフなどを振る演者は、一般に「旗振り」などと呼ばれるが、生地は伝統的な木綿や化学繊維、ポールもグラスファイバー製などさまざまな物が使われるようになっており、香美市土佐山田町のやまもも工房などでも取り扱っている。

こうした旗振り役の人らが集まった練習会なども開かれていて、東京・府中市などでは毎年、旗振り講習会（岡崎よさこい研究所）が開催され、人気を呼んでいる。

高知発祥のフラフやのぼりは、多様に変化するよさこいの中で、なくてはならないものになりつつある。



高知市内で開催された旗振り練習会

「フラフ」とよさこい

木綿の布に手描きで

フラフの生地は木綿、絵柄は基本的に手描きで何枚かの布をつないでつくる。一般的な工程は以下の通り。

- ①下絵の上に布を広げる
- ②もち米の粉を蒸して煮たのりで筒描きする
- ③染料や顔料が混ざらないよう堤防をつくる
- ④支柱を立て間に布を張り彩色
- ⑤乾いたら背景部分を染め、家紋や名前などを入れる
- ⑥色止めをし、水洗いをしてのりを落とし川で流して洗う
- ⑦縫い合わせて完成

絵柄は桃太郎や金太郎、勇壮な武者絵などさまざま。最近では染工場にも、よさこいのチーム旗にフラフをとという問い合わせや注文があるという。



YOSAKOIソーラン祭りで演舞を披露する香美市と積丹町の合同チーム。先頭や後方ではフラフの演舞が...

「フラフ」とよさこい 楠目の染工場

香美市土佐山田町楠目には「フラフ」を製造する染工場が3軒、限られたエリアに並んでいる。

ハチロー染工場、三谷染工場、鍵山染工場。3軒はかつてこの辺りにあったという大きな紺屋（こんや）＝昔は藍染め専門の職人を指したが江戸時代には染物屋全般を総称＝をルーツとし、ハチロー・三谷の両染工場は、縁戚で、兄弟がのれん分けするかたちで、いずれも1902（明治35）年に創業。鍵山染工場は戦後間もなくの1948（昭和23）年に創業、もともとは着物を取り扱っていたという。

すぐ近くには楠目小学校があり、地域学習などの一環として、子どもたちが訪れることも少なくない。とりわけ、ハチロー・三谷の両染工場には、香美市内外から児童が訪れては、昔ながらの染作業の体験をしたり、高校生らの職場体験を受け入れるなど、地域の学校・教育機関などとの関わりも深い。

少子化、節句離れ、飾る場所がない...。時代とともに生活様式は様変わり。フラフへのニーズも多様化し桃太郎、金太郎、武者物などの伝統的な絵柄からオリジナルな物へ、大型のフラフから、よりコンパクトな室内用ののぼりやミニフラフへ、伝統を受け継ぎながら、それぞれが工夫を凝らしている。

3軒の染工場を訪ね、話を聞いた。



「フラフ」とよさこい ハチロー染工場 三谷隆博さん

旗に込められた思い

子どもさんの成長を願うー。それはお父さん、お母さんもそうかもしれませんが、おじいちゃん、おばあちゃんがスポンサーになって、という部分が今も「フラフ」にはあるんです。

そんな、一枚の旗、フラフに込められた思いをずっと大切にしていきたいと思っています。

今でこそ、ひとつふたつ、たてるのが精いっぱいだと思うんですけど、ひと昔前は、親戚のおじさんや、近所から贈られた物を、何本もたてて。そんな時代もありましたからね。

そういう絆であったり、つながりであったり、それを次世代に託していくというものが大事なんじゃないでしょうか。

フラフのつくる工程では、もち米で、のりづけをするんですが、それを最終的に、色止めをした段階で、水洗いで洗い流す。川の近くに染物屋があるというのは、その、のりを落とすという作業があるからだと思います。

それは今でもしていますが、品物がだんだん小型化してて、大きいフラフを物部川でのり落としをするということも減ってきましたね。



三谷隆博さん

「フラフ」とよさこい ハチロー染工場 三谷隆博さん

チームのシンボルに

節句業界では、言い古されたことなんですが、少子化であったり、節句離れであったり、立地、竿を立てる場所がない、庭がないーこの3大要素があって。

お人形さんとかもそうで、家の中に置く場所がない、7段飾りは飾れない。そうしたことにみんな頭を痛めています。

うちにも「よさこい」関係の方が時々おいでになりますが、中には「フラフ」へのこだわりがある方もいて、「ペラペラのポリエステル旗はつくったらいかんよ」って言われたこともあります。

手描きであったり、今は印刷の型もあたりありますが、フラフがよさこいの旗にも使われるというのは、ひとつには、旗というのが、みんなの気持ちをひとつにまとめ、チームのシンボルになるものだ、ということがあるように感じます。

よさこいはお金も、時間もかかりますよね。私も学生のころやったし、OBになってからもやりました。

だから、どれだけの人的パワーが必要か、言葉は悪いですが、どこか「よさこい中毒」というか、よさこいに、はまちゅう人やないと、人と人とが、なかなかつながっていかないんですよね。

その部分を早急にやろうとすると、うまくいかなくなる。いろんなところに成り立たないものが出てくるーそれを自分自身、身を持って感じました。

よさこいに取り組もうとしている楠目小学校や山田高校さんには、根っこの部分を大事にしながら、頑張ってもらいたいと思います。

「フラフ」とよさこい

三谷染工場 三谷章さん

藍染め・紺屋に由来

江戸時代に「横のぼり」と言われていたものが、「フラフ」と呼ばれるようになったようですが、昔、香長平野で藍をつくった藍染めの記録がありましてね。

藍を染めるのに糸を、皆さん機織り機を持っていましたから、機を織って染める。藍染めやったと思いますが、「伊勢型紙」と言うて、和紙に柿渋を敷きまして、彫刻刀で模様を描いた。

京都などでは同じようにやっていますが、その技術が入ってきて、うちの祖父も大きな杉の板にはりつけて、同じやり方で染めていました。

この辺りには、みんな山下姓の4軒の紺屋があって、皆さかのぼるとそうした藍染め、紺屋に由来しています。

以前は、お百姓するにも、今のようにブルーシートやビニールのテントなどはありませんし大きい布がなかったので、フラフをテント代わりにしたり、ふとんを包んだり、時にはカーテンにしたりしてました。



三谷章さん

「フラフ」とよさこい 三谷染工場 三谷章さん

子どもさん守ってくれる

3店それぞれ顔とか配色とか、やり方も違いますが、ひとつの小学校の校区で、目と鼻の先に3店も染物屋があるのは、ほかにはないんじゃないですかね。

フラフは、子どもさんがたくましく育つようにと願いを込めて、節句に揚げます。

そこには、フラフが子どもさんを守ってくれる、という意味合いがあるんです。例えば、よろい、でしたらよろいで守る、金太郎さん、桃太郎さんは強くたくましくと。きっと、楠目の子どもさんたちをフラフが守ってくれることと思います。

香美市の時久（恵子）教育長が、楠目小学校の校長先生をされていたころからでしょうか。子どもさんたちに来てもらえるようになって、フラフやのぼりをどうしてやるのか説明させてもらい、色つけをして、のりを落としたり、染作業の体験をしてもらいました。物部川に行って、野中兼山がつくった水路を見せたこともありました。

昨年、一昨年でしたか、県外の方から注文がありまして、那須与一の絵柄のフラフでしたが、「よさこいで振ってます！」と喜んでいただきました。結構、よさこいに関係する皆さんにもフラフは人気がありますね。

私たちの世代は、「山田」と言うと、打刃物・鍛冶屋さんのイメージが強いんですが、楠目小や山田高校の子どもさんらが「フラフを！」と言うていただけることは、ほんとにありがたい。感謝、感謝です。

何か胸が熱くなるような気持ちになります。

私でできることがあれば、応援させてもらいたいですね。

「フラフ」とよさこい

鍵山染工場 鍵山長大さん

伝統受け継いで

「フラフ」、大のぼり、こいのぼり、旗、幕、はっぴ、のれん、神社のぼり、宣伝のぼり、印染、洗い張り、湯のし、手描訪問着、付下げ、ぼかし染め、無地染め、しみ抜き、洗い...

うちはもともと、着物の型染めを生業としていて、京都で染色を学んで、跡を継ぎました。私で3代目になります。

これから先、未来を担う子どもたちには、伝統的なものが失われないよう、それを受け継いでいってほしいですね。

今、古くから伝わるいろんな風習がなくなってきているでしょう。節句自体も、だんだんなくなってきていますよね。それは今の子どもたちに、内容とか、それがどういうことかが、伝わってないから、結局は廃れていっているんだと思います。

それをある程度理解し勉強してもらって、後々へと伝えていくことができれば一番いいんですが。



「フラフ」とよさこい

鍵山染工場 鍵山長大さん

フラフ街道を

少子化で子どもが少ない。それも原因のひとつなんだと思いますが、最近はおじいさん、おばあさんが「節句にフラフを」と言っても、断る若いご夫婦もおられます。

まだ、野市の方では大きなフラフを立ててますが、そうした風景は、探さないとなかなか見当たらない。

地元の人でも意外に、フラフのことも知らないし、なぜ、フラフを揚げるのか、知らない方が多くなっているように思います。

竿を立てて、あげたりおろしたりするのは大変ですし、広い庭もなくなっているので、みんな外に立てないようになっている。

せめてベランダにと、小さめの物を進めても、実際はほとんど室内に飾られているようです。

私の理想は、例えば、フラフ街道のように、ばあーと、道路沿いにフラフが立っている。そんな光景が「どこかにあったらいいのになあ」と思います。

車で走ると、フラフが風になびきゆうというような、そんな空間ができないものかと思います。

竿を立てるか、ロープを張って、そこにずらりとフラフを揚げて見せる。そういうところがあってもいいですね。フラフ通りができないかな、そんなことを思っています。

よさこい衣装 グリーンライン オム. (土佐山田町西本町)

自分自身が満足できる仕事を

JR土佐山田駅の近く、香美市土佐山田町西本町の道路沿いに、よさこいの衣装製作を手掛ける「グリーンライン オム.」がある。

同市出身の秋友健さんが2008（平成20）年に開業。「デザインの種類が多いので、万人に受けるといえるか、あと値段を明確に出すことで、オーダーしていただく方が買い求めやすいようにしています」と秋友さん。

心がけていることは、自分自身が満足できる仕事をする事。「金額のことだけを考えたときに、ああこれはもうかるかも、というものがあっても、自分が楽しくできない場合は、お断りするようにしています。最初はそういう仕事もしていたんですが、何かわだかまりのようなものを感じるようになって、いい物だけを出したいなって」。

よさこいのプロデュースなどは手がけずに衣装専門。大半が県外からの発注で、これまでに沖縄県を除く「ほぼ全国の都道府県から注文をいただきました」。チームによっては「踊り子さんの人数が十分に集まらない場合もありますので、最低5枚から受けるようにしています」という。

利益だけを見ると、一度に同じもの大量に注文してもらった方が効率がいいようにも思うが、「衣裳が5枚10枚のチームであっても、それぞれそこには、いろんな発想があって勉強になりますし、面白いデザインなるんです」。秋友さんならではのこだわりがそこにあった。



よさこいの「聖地」やまもも工房

職人の手づくり鳴子 よさこいグッズも多彩

香美市とよさこいのかかわりで、欠かすことができないのが同市土佐山田町の「やまもも工房」。

やまもも工房は、(株)ダイヤモンド観光ビジネスの製造部門の名称で、同社製品のブランド名（登録商標）だが、全国各地のよさこい人からは「やまももさん」の名で親しまれている。

蔵を改造した「鳴子ギャラリー」（写真）は、よさこい発祥の地高知の「聖地」にもなっていて、県内外から訪れるファンも少なくない。

最近では、同市の山田高や楠目小学校の先生や児童生徒らが、同工房の鳴子づくりの過程などを体験・学習する光景も。

同工房は、県職員として観光部門の仕事に携わっていた公文善次郎さんが、県庁を退職して始めた。

県庁在職中、公文さんは県庁バンドで演奏、よさこいの生みの親で作曲家の武政英策とも知己がある。また、よさこい祭振興会が初めて海外に踊り子隊を派遣した1972（昭和47）年の二ース・カーニバルにも参加したという。

創業当初は、土佐和紙や土佐つむぎの民芸品に力を入れていたが、1992（平成4）年、札幌で始まったYOSAKOIソーラン祭りを機に、環境が一変。全国各地によさこいが広がっていく中で、鳴子などのニーズが高まり、自前で鳴子を製造販売していく方向にかじを切った。

鳴子の大きさ、かたち、色…。丹念にひとつひとつ、職人が手づくりで仕上げているのが、「やまもも流」。鳴子だけではなく、イヤリングやピアス、髪飾りなどの鳴子アクセサリー、フラフ・チーム旗やグラスファイバー製のポールなど、多種多彩なよさこいグッズを取りそろえている。



よさこいの「聖地」 やまもも工房

ソーランから全国、海外へ

やまもも工房のエピソードのひとつに札幌のYOSAKOIソーラン祭りをめぐる話がある。

当時、県北海道事務所長だった山崎栄三さんと同工房の公文善次郎さんは、県庁時代からの顔見知り。ある日、山崎から電話があった。「北海道で学生たちがよさこいをやる。1000組の鳴子を用意してほしい」。代金が支払えるかどうかも分からない依頼・相談だった。そんな無理難題に、公文さんらは鳴子をかき集めて北海道に送った。

そうしてつながった縁は、県内から全国、海外へと広がっている。

2011（平成23）年から、次男の佑典さんが公文さんの跡を継いだ。

毎年、ブースを構える「原宿表参道元気祭スーパーよさこい」。全国から集まった踊り子たちで工房のブースはひときわにぎわう。

「いつも踊り子さんにエネルギーをもらっています」。公文さんらはうれしそうに話す。

鳴子は、基本型のレギュラー鳴子、子ども用のミニ鳴子、手で持つ部分に改良を加えたスペシャル鳴子の3タイプに大別される。切り込みを入れ工夫した「鳴る鳴子」、桜・コスモス・パンジー・ボタン・バラなど四季折々の花をあしらった、繊細で愛らしいデザインが特徴の「花鳴子」（写真）など、アイデアを凝らしたものを次々と発表。

バチに国旗をデザインした「国旗鳴子」（写真）は、以前、アメリカで開催されたジャパンウィークでつくったものを改良。海外でよさこいを広めるために県が認定した「よさこいアンバサー」や海外チームのほか、サッカーワールドカップの応援にとベルギー大使館から注文があるなど人気を集めている。



踊り子 カメラで追う！ 公文善之さん（香美市出身）

スーパーよさこいオフィシャルカメラマン

東京・原宿の表参道、ケヤキ並木を横目に演舞する踊り子たち。カメラを手にその姿を追い、最高の1枚を狙う男性がいる。「原宿表参道元気祭スーパーよさこい」のオフィシャルカメラマン、公文善之さん（東京都在住、香美市出身）。

2001（平成13）年、原宿スーパーよさこいが始まったころからずっと、こうして写真を撮り続けている。

高性能のデジタルカメラが普及し始めた20年ほど前、趣味のひとつとして始めたのが「写真」だった。

「僕の場合、地方車から流れる音楽をまず聴く。で、各チームの音楽を覚えて、どこに盛り上がりがあるのか、踊り子さんと一緒に、流れる音楽を同じように感じながら撮っていくんです」

ある踊り子の前で、体がかがめシャッターを切ったかと思うと、好ポイントを探し前へ後ろへと猛ダッシュ。「実は、最初の1時間くらいはほとんど記憶がないんです。無意識で撮っていて」。目線が上からになると撮れる絵が面白くなる。必ず踊り子さんと同じ目線か、それよりちょっと下から撮るようにしているという。

「僕は、先に絵を決めてから撮るんです。この踊り子さんは、こういう絵が撮りたいと思ったら、その絵が撮れるまでシャッターを切らない。それが撮れたらひたすら走って次の絵を撮りにいく。だから、いつもへとへとになるんですが」

初日はNHK前、2日目は表参道で踊り子隊を追う。撮った写真は、原宿スーパーよさこいの公式写真、ポスターなどに採用されているという。



踊り子 カメラで追う！ 公文善之さん（香美市出身）

「原宿は緑がきれい。だから緑が入る場所を探し、チームの衣装の色をどう入れ、メインの人をどう撮ってと、頭をフル回転させながら撮っています」。会場のどんな場所でも撮影ができるのがオフィシャルカメラマン。公文善之さんは「趣味で始めたアマチュアが、地方車のすぐ前とかで撮らせてもらえる。最初はそれが楽しくて夢中で撮っていたんですけど、写真を見た、踊り子さんたちが本当に喜んでくれる。そこから、これは記録に残してあげたいなと思うようになって」。

年を追うごとに体力的に厳しくなり、やめようと思ったこともあったが、「楽しい、楽しくないという次元を超えて、もうこれはライフワークとして続けるべきなんだろうと思っています」と話す。

実家は「やまもも工房」

公文さんの実家は、香美市土佐山田町で鳴子などの製造・販売を手がけている「やまもも工房」。踊り子の写真を撮り始めたのも両親の善次郎さん、美佐子さんの仕事を手伝うためだった。原宿だけではなく、よさこい祭りのときには東京から里帰り、本番の2日間撮影しているという。

両親の仕事柄もあり、チームや祭りを運営する人らとの交流もある。

「運営側の人たちが何を感じ、どうやってこのチームを、この踊りをつくったのか。チームによって先頭にいるのがインストラクターの人だったり、踊りが上手な子だったり、リーダーシップを取りたい子だったりそれぞれ全然違う。そんなことを感じながら撮っていて、で、あとから『どこそこのチームの誰誰さんがね』って話を両親から聞くと、『ああ、あそこで踊っていたあの子が』って、つながっていく。そういうところもよさこいの楽しさのひとつですね」



※公文善之さんが撮影した2019年の原宿スーパーよさこい・よさこい祭りの写真＝やまもも工房HP「よさこいグラフィティ」より

踊り子 カメラで追う！

公文善之さん（香美市出身）

「原宿では、地方車の一番前で大きい音を聞きながら、踊ってる方が本当に楽しいって気持ちを爆発させているのを真正面で受け止めています」

そう話す公文善之さんは、何かから解き放たれたような自由な表現・エネルギーを、よさこいから感じてきたという。

10年、20年たつと、中学生だった子も大人になる。「ああ、あの子ども、大人になってきたな。このチームは随分、変わってきたな」。そんな変化をファイナダー越しに見ながら、原宿と高知で踊り子の姿を記録し続けてきた。踊り子を撮るのは1年のうち4日間だけ。「その4日間は、僕にとって、ものすごく凝縮された時間です」



後日、公文さんのオフィスを訪ねた。オフィスは東京都心を一望する六本木ヒルズ森ビルの39階にあった（写真）。公文さんの本業はゲームクリエイター、ソーシャルアプリを開発する会社を立ち上げた起業家でもある。

片地小→鏡野中→小津高→青山学院大へと進んだ公文さんは、高校生まで香美市で過ごした。豊かな自然の中で、野山を駆け回って過ごす一方、中学からは吹奏楽部に入部し楽器を演奏、親戚からもらった古いパソコンを使って自作のゲームをつくっては友達と遊ぶ子だったという。

Windows95が発売され、インターネットが爆発的に広がっていった学生時代。ネットに詳しい先輩の紹介で、プログラムを書いて納品するアルバイトを始めた。「当時、インターネットに詳しい学生たちは、大人が持っていない価値を提供できたんです」。大学院を出るとベンチャー企業を立ち上げ、のちに、ネット業界で華々しく活躍するさまざまな人たちと新たなビジネスを始めることに。その後、ヤフージャパンを経て2009（平成21）年、ゲームアプリの企画・開発・運営を行う「enish」=東証1部上場=を知人とともに設立した。

ものをつくり、作品をつくる。ゲームも写真も同質だということ公文さんは、どんなに忙しくても、帰郷し、香美市が中学生を対象に実施しているキャリアチャレンジデーの講師を務めている。「人が育っていく中で、都会には絶対はない、体験したい、体験させたい素晴らしい環境が香美市にはあります」。最後に生まれ育った古里にエールを送った。



再開！北と南の児童間交流 香美市教育長 時久恵子さん

数年前、この十数年間途切れていた北と南の児童間交流が再開した。大人から子どもへと引き継がれる新たな交流。そしてよさこいプロジェクトに取り組む児童生徒たち。香美市とよさこいの不思議な縁は、これからどんな絆を結んでいくのだろう。香美市教育長・時久恵子さんに話を聞いた

香美市と北海道・積丹町の子どもさんとの交流の経緯を振り返ってみますと、1992（平成4）年にYOSAKOIソーラン祭りが始まり、それを企画した北海道の学生さんたちを土佐山田町で受け入れ、両町の交流が始まったと聞いています。

翌年3月には、積丹町の「まちに灯りを灯す会」から平山小の児童に雪だるまが届き、2つの町の子どもたちの交流も始まっていきます。

そのころ私は香美教育事務所において、北海道から雪だるまが届いたという話を、当時の教育長さんからお聞きする程度で、そのあたりの詳細は役場におられた濱田（賢二）さんがお詳しいかと思えます。

平山・余別両小の交流「あれはしょう良かった...」

私自身の積丹町とのしっかりとした出会いは、教育長に着任した翌年の2011（平成23）年6月、YOSAKOIソーラン祭りに合わせて積丹町にお伺いしてからになります。

当時は、平山小学校が休校になり、子どもたちの相互訪問が途絶えてしばらくたっていました。そのころから「積丹町とのこの交流を大事にしていきたい。大人だけでなく、香美市の子どもたちがまた積丹を訪問できるようになったらいいですね」と、当時の門脇（楨夫）市長さんともよく話をしていました。

平山は、門脇市長さんの地元だったこともあって、以前のことでもよくご存じで「平山小と余別小の交流、あれはしょう良かった...」と、口癖のようにおっしゃっていたのを今でも覚えています。



香美市教育長・時久恵子さん

再開！北と南の児童間交流 香美市教育長・時久恵子さん

【積丹町との児童間交流が再開するまでの経緯】

札幌でYOSAKOIソーラン祭り始まる

旧土佐山田町と北海道・積丹町の交流スタート



平山小に積丹町の「町に明かりを灯す会」から雪だるま届く



平山小と積丹町の余別小児童の相互訪問始まる



平山小と余別小が姉妹校提携



旧土佐山田町と積丹町が姉妹都市提携



平山小が休校。児童間交流途絶える



市町村合併で香美市が誕生



香美市と積丹町の児童間交流再開

十数年ぶりに...

数年前、積丹の町長さんがこちらに来られたらことがありました。

2月だったと思いますが、市長室の窓から外を見ながら「雪のないこういう景色を、積丹の子どもたちに見せてあげたい」という話が町長さんからあって。そのときに「また子どもたちの交流をしたいですね」となっていたんです。

町長さんからは「できれば冬、おいでよ」と言われて、今でもよく言われますが「あの雪の景色を見せてあげるから」と。「積丹の子は雪のない香美市を見たらきっと喜ぶでしょうね」—そんな話で意気投合しました。

それで平成27年度、十数年ぶりに姉妹都市積丹町との児童交流を再開することができました。

いきなり冬に行くのは、自分たちもあまり経験がなかったので、子どもたちを無事連れてい行くことを考えたときに、心配で、最初はこちらから5、6年生が3泊4日の日程で夏に行って、積丹町には冬に来てもらうことにしました。

再開！北と南の児童間交流 香美市教育長 時久恵子さん

よさこい、フラフ、打刃物

朝、こちらを出ても積丹町に着くの夕方くらい。初日は表敬訪問と歓迎会。あくる日、半日は学校訪問しようということで、中2日、1日半くらいを、船に乗って海へ行き、ウニを見たり、カモメにえさをやったりして、2晩目は町内でホームステイをして過ごすようにしています。

行く前に、何を紹介しようか、子どもたちと話し合ってますけど、いつも、積丹の子どもたちに教えてあげたいことの一番に出てくるのが「よさこい」です。それからフラフ、打刃物という順番ですね。

香美市の場合、小学校がいくつかあり、そこから参加する子が集まってくるので、事前に日程を調整するのに時間がかかり、向こうでよさこいを踊って見せるというところまで、まだできていませんが。

積丹町について

積丹町は人口が約 2,000 人、面積は 238.21km²となっており、北海道西海岸の中央部、北西に突出している積丹半島の頭部に位置しています。海洋性気候で夏、冬ともにしのぎやすく、雨、雪の量は比較的多いほうです。

積丹の語源はアイヌ語で、シャクとコタンの二語を合わせたものです。シャクは夏、コタンは村または郷土のことで、シャクコタン(Shak Kotan)夏場所という意味からきています。



積丹半島開拓の歴史は古く、明治から昭和初めにかけてニシン漁の大漁場として発展し、当時の番屋、トンネル、旧街道などが残されています。産業の中心である漁業の中でも特にウニは積丹町の名物であり、6月のウニ漁、秋のサケ漁、冬季のタラ漁と四季を通して水揚げがあります。



また、積丹町の海岸はおよそ 42km あり、切り立った断崖や奇岩、シャコタンブルーといわれる「神威岬」の景観は絶景です。積丹半島はニセコ積丹小樽国定公園に含まれており、積丹の海は北海道で唯一、海中公園に指定されています。



再開！北と南の児童間交流 香美市教育長 時久恵子さん

家族ぐるみのつき合いに

これまでに、1回だけですが、積丹町に冬おうかがいしました。子どもたちは本当に大喜びで、町長さんかスキーウェアなどを全部準備してくれていて、迎える準備万端。この交流に町を挙げて力を入れていただいていることを実感しました。

香美市に来た時には、各学校を訪れ、フラフの染物体験や龍河洞、アンパンマンミュージアムなどを見てもらい、夜は積丹町と同じようにホームステイをしてもらっています。

令和元年度は、8月22～25日まで8人が積丹町を訪れ、積丹町からは6人の児童が1月9～12日までの日程で来市、片地小の子どもたちとも交流を深めたようです。

交流が再開したときに積丹町を訪れた子どもたちは、いま高校生になっています。今も子どもたち同士で連絡を取り合っていて、年賀状を送ったり、メールなどで日常的な会話を交わし「今度、みんなで会おうよ」と再会する日を心待ちにしているようです。

温度差はあるかもしれませんが、ホームステイなどを通して、姉妹都市の距離が、より近くなり、子どもたちは友達として強く結びつき、家族ぐるみのつき合いになっていっているように感じます。



再開！北と南の児童間交流 香美市教育長 時久恵子さん

大人と子どもの交流大切に

初めて積丹町を訪れた際、札幌のYOSAKOIソーラン祭りを見学しました。そこで、香美市と積丹町の合同チームの皆さんが生き生きと踊っている姿を目の当たりにし、大人同士が交流することの値打ちというものを、強く感じました。

と、同時に「子どもたちの交流」ということについても考えさせられました。より若く、感受性の強い、低年齢の時に誰かと出会うということは、大人になって交流を始めるのとはまた違って、大事な関係性のある町の存在が、強烈に、強く印象に残ることになるのではないか。そういう経験を香美市の子たちにさせてあげたい、と思うようになりました。



実際に、交流を再開すると、思っていた通り、子どもたちは積丹に行ったその日から「積丹の人たちは親戚」となりました。

交流初日、積丹の方々がある温泉に連れて行ってくれるのですが、そこに行くと、「高知から来たのかね？おんちゃんらも香美市に行ったよ」と子どもたちに声をかけていただき、初めて会った人なのに、近所のおじさんみたいな感じで、話が弾みます。

だから「積丹はいい人たちが住んでいる町」「優しい人たちが住んでいる町です」—そうしたことが子どもたちの感想に、ほんとにいっぱい出てくる。

香美市の人たちと同じように、積丹の方たちは、とても子どもにも優しく、交わりが温かいんです。そういうのを肌で感じて、しかも気候風土の違うところで、たくさんのもので帰ってくる。この子どもたちの交流をこれからも大切にしていきたいと思っています。

この子たちの中からいつか、YOSAKOIソーラン祭りに踊りに行く人が出てきてくれると思います。そして、積丹町とのつながり、香美市のこれからのまちづくり...いろいろなことを考ながら、交流を続けていってくれる子たちにきっと育ってくると思っています。

よさこいと香美市の子どもたち

香美市教育長 時久恵子さん

学園都市構想

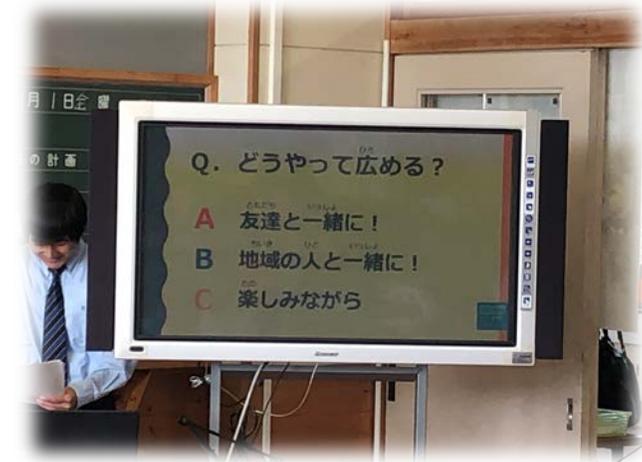
香美市学園都市構想の中で、保幼小中高大と全部を結んで、まちづくりをみんなでやっていくというのが浸透してきています。

山田高校は県立学校なので、以前はどうしても若干遠かった？そこにあるけど、学校が門戸を開いてくれないと中に入っていけない。

それが、数年前、前校長の濱田久美子さんあたりからぱっと開いてくれて、香美市の核になる学校になってくれている。

何かあると、山田高にすぐに相談に行ける—そんな関係ができていく中で、小学生に対しても山田高生が、いろんな提案をしてくれる。発表の仕方、プレゼンの仕方、さまざまな活動にしても、モデルになる。

先生方にしてもそうだと思いますし、子どもたちにとっては「あこがれのモデル」という位置づけになってきているように思います。



よさこいと香美市の子どもたち

香美市教育長 時久恵子さん

まだ単発だが...

そうした一連の流れの中に、楠目小の3年生の総合的な学習の時間の公開授業がありました。最初からよさこいを、というよりは、もともとは、大好きなこの町をもっと知りたい、どうやったら元気にできるのかな？そんなところから勉強が始まっていると思います。

その途中で、あそこはフラフの工場がすぐ近くにあるので、そんなところから山田高生がフラフの衣装を着てよさこいの前夜祭に出たというのを知って、話を聞かせてもらおうということになった。

楠目小だけではなく、いろんな学校が、山田高とつながって、勉強させてもらい、子どもたちの発想を広げてもらいたいというのがあって、よく交流をしています。

まだ、単発の取り組みではあるんですよ。楠目小のよさこいプロジェクトはこれはこれ、山田高のこれはこれと。実際には、山田高がビジネス探究科がよさこいをテーマにプロジェクトをやろうとしていること自体、学校の先生方や子どもたちも、あまり知らないと思いますし、一般の方も、よさこいと香美市に深いつながりがあったとは思われていない人が大半なのではないでしょうか。

子どもは感覚が純粹で、生き生きしているので、香美市の良さを掘り起こしたり、もっと元気にできないかなと思ったときに、よさこいに結びついた一今はそういう段階だと思います。



香美市とよさこい（年表）

～よさこい祭り20年史等より引用・抜粋～

土佐の踊り今昔

遠隔の地・土佐は踊りの伝統が少なく、変遷をたどることは非常に困難。伝統の踊りとして、現在、見られるのは、神楽や念仏踊り、盆踊り、太刀踊り、棒踊り、小踊りなどがある。

土佐の郷土芸能の起源は古く、古代・中世にさかのぼる。すべてが民衆の信仰の中から生まれた。信仰のための儀式や祭礼に伴う、さまざまな踊りが各地で行われていた。

信仰は、霊を慰めること（祖霊）と実りが豊かであることを紙に祈ること（豊作予祝）の二つに大別される。

中世になると、各地にあった多くの芸能が、田植えの行事「田楽」に一度含められ、近世初期から再びいろいろな踊りに分かれていった。

その過程で、江戸文化の中に入ったものは芸術化され、一般に観賞する芸として発達。現在の日本舞踊や宮中神楽、歌舞伎などが生まれてくる。

一方江戸文化の影響を受けることが少なく、地方の神社や寺の奉納芸、地方民間の余興芸として定着したものがある。

これは芸術化されず、元の形をそのままにとどめたまま、神社や寺、修験者などによって、信仰の行事、布教の手段として民衆に広められていくのである。

土佐の郷土芸能は、江戸文化の影響が少なく、中世にあった踊りの形をほぼそのまま伝えているといわれ、極めて貴重である。

海辺に比べ、比較的山間部に多く残っている。一般に山間部の人たちは保守的で、物を大切に残す気性がある。海辺の人は進取的であるが、一獲千金の生活様式から「宵越しの銭は持たない」という気性。海辺に伝統の踊りが少ないこともうなずける。

香美市とよさこい（年表）～よさこい祭り20年史等より引用・抜粋～

いまひとつ、文化的な変遷が見られない原因として、華やかな江戸文化から隔離された風土と気質が考えられる。

文化の遅れた土佐の人々は、古代、中世の信仰からくる素朴な踊りは、ごく自然に受け入れたであろうが、近世の芸術化された江戸文化の芸能は、特定の者以外、吸収できないものであったから。

近世に入っても、祖先の霊をなぐさめる盆踊りは各地で盛んだった。しかし、初期には、執政・野中兼山の緊縮政策により、神社や寺での祭礼がやりにくくなったのと、兼山失脚後、復活はしたが、風俗の乱れによる踊りの禁止などもあって、すたれていった芸能も多かった。

香美市とよさこい（年表）

～よさこい祭り20年史等より引用・抜粋～

いちじゃもの～ 花台からよさこいへ

近世以降、民衆の喜び、祈りの表現は、ある面で大きな変化を見せた。明治、大正に生きた人たちにとって、昔なつかしい「花台」がある。

1971（昭和46）年夏、鏡川河畔の柳原で開催された「フェスティバル土佐・鏡川まつり」で、会場入り口に花台の模型が登場し人気を呼んだ。

近代高知の祭礼風習に最後の名残をとどめる花台は、明治から大正初期の頃まで高知の名物だった。

特別仕立ての大八車の上に四層、五層に飾られた花台は、神社の祭礼の時、町々に繰り出し、「いちじゃもの、いちじゃもの、〇〇の花台はいちじゃもの…」と、太鼓や三味線、胡弓ではやしながら豪華さを競い合った。

娯楽の少なかった時代、派手なことの好きな土佐の人たちにとって、この花台の出る祭礼は最も楽しい行事だった。

花台は、山内家2代忠義公の時代、2人の御用商人が長崎に出掛け、同地の花鉾を見て帰国。1664（寛文4）年、朝倉神社の大祭に両家から笠鉾を出して、驚かせたのが始まりと伝えられている。

太鼓のドンと胡弓のリュウリュウ...という音色をとって、「トンリュウ」とも呼ばれた。全国的に見られる郷土芸能の御神幸（＝おなばれ）に余興として参加したもので、それらの中で最も豪華と言える。

これはのちに、発想は異なるが、よさこい節を街頭へ出した「よさこい鳴子踊り」の着想につながっている。

花台は藩政、明治にかけ「おらんく自慢」として高知の名物だった。

香美市とよさこい（年表）

～よさこい祭り20年史等より引用・抜粋～

明治の後期、高知市中に電車や電灯がお目見え、電線電話線がはりめぐされるようになると、高い花台の運行ができなくなり、この伝統は次第に姿を消していった。

それでも大正の初期頃には、神祭などに飾られた定置花台がよく見かけられた。

以後、盛衰はあったが、花鉾の上に鉦や太鼓、胡弓を入れてはやしたて、人形を飾るといった様式が出来上がったのは文政の頃で、城下の町々が意匠を凝らして花台を競い合った。

これらを見ると、また、質実剛健な土佐の気質が踊りよりも古代から相撲、力比べなどにエネルギーのはけ口を求めたのではないか。もっとも相撲、力くらべも起源をただせば、信仰につながるのだが。

多くの踊りが、霊をなぐさめることと同時に、五穀豊穡を祈る意味が多いにもかかわらず、県内第一の米どころ、高知平野に見られないのはなぜか。

土佐に伝わる踊りは、中世のものが多く、集落の中心は、山の尾根づたいに散在。この頃の、高知平野はほとんどが湿地か、浦戸湾の海底であり、開けたのは近世になってからである。

芸者の手踊りに代表される江戸文化の踊りは、地方にほとんど見られない。まして藩政時代、高知平野を開拓した人たちは、長宗我部氏以来の郷土であり、武骨者の、武士あがりの、これらの人たちは、信仰はあっても踊りはなかったのである。

香美市とよさこい（年表）

～よさこい祭り20年史等より引用・抜粋～

廃虚の中から

第2次世界大戦も深まった1945（昭和20）年7月、高知市は米空軍のB29爆撃機によって、市街地のほとんどが廃虚と化した。

8月15日終戦、1946（昭和21）年の南海大地震と重なる不幸な出来事の中、物資不足にあえぎながら再建への苦しい闘いを始めた。

次第に落ち着きを取り戻していく世相の中で、民衆の心に芽生えてきたものは、心の安らぎ、歌や踊りなど娯楽への渴望だった。

1947（昭和22）年、高知市では第1回復興祭が催された。市民の閉ざされた心をやわらげ、復興への意欲を盛り立てようというものだった。

テーマ音楽なども用意され、できるだけ陽気に「お祭り騒ぎ」。しかし、歌は民衆の心に残らず、祭りが済むと忘れられた。

復興祭という趣旨の催しは、その後、毎年開かれた。1950（昭和25）年3月、高知市の主催で復興祈願を目的とした「南国高知産業大博覧会」が開催された。

関係者の間でまたまたテーマ音楽について議論を重ねた。

「復興祭の例でも分かるように、歌をあまり歌いたがらない高知では、何回作っても同じだ。それより、よさこい節を街頭へ出そうじゃないか」というのが結論だった。

博覧会のテーマ音楽がよさこい節と決定。古くから伝わる土佐の民謡だが、歌だけでは面白くないと、日本舞踊の5流派（花柳、若柳、藤間、坂東、山村）の各師匠に依頼して踊りの型を作ってもらい、よさこい節が初めて街頭に出た。

こうした着想は、博覧会で成果を上げ、次第に一般にも広がって、1953（昭和28）年には芸者、中居、素人も加わった「よさこい踊り子隊」が徳島県の池田まで招かれていくことになった。

香美市とよさこい（年表）

～よさこい祭り20年史等より引用・抜粋～

池田でも評判は良かったが、にぎやかで力強いリズムの「阿波おどり」に立ち向かうには、よさこい踊りはあまりにやさしく、お座敷的でありすぎた。

5流派の師匠たち、関係者にとって、これが刺激となり、また契機となって、翌1954（昭和29）年4月になると、高知商工会議所観光部会が新しい踊りの型による「よさこい祭り」の構想を打ち出したのである。

武政英策さんと濱口八郎さん

よさこい祭りの構想がまとまるまでには、高知商工会議所観光部会で協議を重ねること2カ月余、10数回の会合をもち、概要を詰めていった。こうした機運が急速に進んだ原因のひとつに、当時の社会情勢が挙げられる。

1953（昭和28）年後半から1954（昭和29）年前半にかけては農作物の不作、貿易振興、国際収支の悪化、金融引き締め強化などによって、全国的に不況が浸透、デフレが本格化し、県内でも各方面に深刻な影響が現れた。

高知市の場合も例外ではなかったが、行政的には市の都市計画がほぼ出来上がり、市民の生活は落ち着きを見せ始めていた。

よさこい祭りは、こうした不景気風を吹っ飛ばし、市民の尾健康と繁栄を祈願するとともに、夏枯れの商店街振興を促すため、高知市民祭の一環、夏の一大行事として、毎年行うこととした。

香美市とよさこい（年表）

～よさこい祭り20年史等より引用・抜粋～

期間は、高知測候所で過去40年間のデータを集め、8月上旬で最も雨の少ない10～11日に行う。1951（昭和26）年から毎年8月10日に打ち上げられていた花火大会を、祭りの初日に行なう。祭主は市議会議長とする。県内から大勢の人出がある「しなね祭」との合流も検討されたが、単独挙行とする...などなど概要が決められた。

ここで武政英策さんの登場となる。当時から、土佐わらべ歌の発掘や全国の人々の喜びのリズムとして伝えられている黒潮のリズムの研究などを行い、広く作曲活動を続けていた人。

「市民の健康祈願祭に阿波おどりに対抗するような、踊りみたいなものをやりたいが考えとうせ。祭りは8月10、11日と決まったから、今月中に頼む」。高知商工会議所観光部会の濱口八郎さんが、武政さんを訪問したのは6月25日。

その結果、黒潮リズムを基調とした「ヨッチョレ、ヨッチョレ...」の軽快なリズムが生まれ、土佐なまりをふんだんに盛り込んだ歌詞もできた。

鳴子を持つアイデアを出したのも武政さんだった。年に米が二度とれる南国土佐のシンボルとして、雀追いの鳴子と、その音に目をつけた。

踊りの型は、また日本舞踊5流派の師匠さんたちに頼み、街頭を流す工夫が凝らされた。

「郷土の歌や踊りは、大衆が生み育ててゆくもので、時代や人によって変わる」と言われるように、よさこい鳴子踊りも当初は行進に問題が多く、回を重ねるにしたがって改められたり、さらに新しい型が生まれてくる。よさこい鳴子踊りは、こうしてリズムも歌詞も踊りの振り付けも出来上がった。

香美市とよさこい（年表）

～よさこい祭り20年史等より引用・抜粋～

いよいよ本番へ

1954（昭和29）年の7月初め、よさこい祭り準備委員会を招集して、「よさこい祭振興会」が発足する。振興会の主体は、高知商工会議所、高知県観光連盟、高知市観光協会、高知新聞社で、後援を高知県、高知市、NHK高知放送局、ラジオ高知（現＝高知放送）、高知市商店連盟として、会則も定められた。

祭りの運営進行を図るために、振興会の中に専門部を設け、総務、進行、舞踊審査、資金、宣伝、祭典の6部門を設けて準備活動を開始した。

資金部委員会は県、市はじめ金融関係、娯楽関係、商店関係に分かれて資金集めに奔走。

宣伝部委員会は宣伝用レコードの吹き込み、ポスター制作や宣伝踊り子を街頭へ送り出した。

進行や祭典、その他の委員会もそれぞれ、運営進行計画、祭典、舞台の位置の検討などに努めた。

こうした中で、よさこい鳴子踊りの新作発表会が商工会議所で開かれた。

踊り子は朝倉小学校教職員児童、料理店、旅館のメンバーで、報道関係者や一般参観者も多数出席、好評を博した。

8月に入って、準備は大詰め。市民や商店、各種団体等もきわめて協力的で、銀行協会では8月10日を高知市に限り、臨時休業することとした。

よさこい鳴子踊りは、初めての催しであるために、一般の参加が少なく、郷土芸能との競演を余儀なくされた（2回目以降はよさこい鳴子踊り一本となる）。しばらくの間は舞台を設置し、審査は高知新聞社が担当することになった。

何もかもが、即製の出発だったが、1951（昭和29）年8月10、11の2日間にわたる「第1回よさこい祭り」を迎えた。

香美市とよさこい（年表）

◆1954（昭和29）年＝第1回よさこい祭り

よさこい祭り始まる

1町5村合併し旧土佐山田町誕生

県内外の主な出来事＝デフレに伴う不況から社会不安が増大。町村合併により、9月、香美郡内の山田町、明治村、大楠植村、片地村、佐岡村、新改村の1町5村が合併し土佐山田町が誕生したのもこの年だった。

高知県商工会議所が、伊野と御免地区を合わせて「高知商工会議所」と改名し発足。不景気風を吹っ飛ばし、夏の一大行事として、観光土佐の newName にしようとの願いを込め、「第1回よさこい祭り」が8月10、11の両日、開催された。

高知商工会議所、高知県観光連盟、高知市観光協会、高知新聞社主催、高知県、高知市、NHK高知放送局、ラジオ高知（高知放送）、高知市商店連盟の後援により構成された「よさこい祭振興会」が実施主体となった。

市議会で高知市民祭

8月10日（火）午後1時、高知市議会議事堂で高知市民の健康と繁栄を祈願する高知市民祭により、スタート。

合図の煙火とともに、揃いの浴衣、法被、すげ笠、あねさんかぶりなどのスタイルで踊り子隊が街に繰り出した。

にぎやかなハヤシに合わせた手拍子、足拍子、鳴子の音もさわやかに酷暑にめげず乱舞を開始。合成酒のただ飲み大会なども行われた。

午後2時から、高知公園追手門内の本部競演場と帯屋町2丁目、グリーンロード、はりまや橋、本丁筋3丁目、愛宕町、菜園場、梅ノ辻の市内7カ所に設けられた「協賛舞台」で郷土芸能（舞踊）やよさこ鳴子踊りを披露。

また、踊り子たちは、市内の繁華街を練り回り、徳島の阿波おどりの一行も協賛して市民の拍手を浴びた。

香美市とよさこい（年表）

初回は郷土芸能と競演 鳴子踊りには750人

追手門内に特設された審査舞台では、初日は主に郷土芸能21団体の審査が行われ、新作鳴子踊りも4チームが番外で飛び入り参加した。

郷土芸能は、太刀踊り、盆踊り、銭太鼓、棒踊り、獅子舞、武士踊り、豊年踊り、どろんこ踊りなどなど。

最終日の8月11日は、午後2時から市内各地区から老若男女の踊り子が参加して、追手門内でよさこい鳴子踊り競演会を開催。ハシケン関所破りなどの行事も行われ、踊りおさめは午後11時半、はりまや橋で解散した。

8月10、11の両日に参加したよさこい鳴子踊りの参加団体は21団体で、約750人。

【よさこい鳴子踊り参加団体】

高知市料理業組合（60人）玉水町（10人）井口町
曉市場（20人）五丁目公民市場（20人）高知市役所（50人）若柳流連中（60人）新本町二丁目（10人）栄田町（20人）潮江町（40人）菜園場町（17人）愛宕町子供組（13人）愛宕町大人組（30人）安芸郡芸西村（25人）高知専門店会（50人）帯屋町専門連鎖店（100人）中種京町商店連盟（50人）四国銀行（100人）大橋通り商和会（30人）柳町美松（10人）本丁筋三丁目（15人）本丁筋五丁目（30人）高知商工会議所（30人）

香美市とよさこい（年表）

◆1955（昭和30）年＝第2回よさこい祭り

前進速度増した踊りに 紫雲丸惨事

県内外の主な出来事＝景気後退から抜け出し、翌年にかけて神武景気と呼ばれる戦後最大のインフレーションの時代に入る。宇高連絡船「紫雲丸」が高松沖で転覆。修学旅行中の高知市立南海中3年生28人を含む死者不明者173人という惨事が起きる。

前年の第1回の内容に対して、種々の批判の声があった。振興会は阿波おどり視察調査なども行い、歌詞、踊り、運営方法などを再検討。

前進速度を増すなど改良を加えた鳴子踊りを採用。運営面では郷土踊りは原則やめ、郡部団体にも鳴子踊りの出演を依頼、全踊り子が市中行進して競輪場で乱舞、花火とともにフィナーレを飾ることを決定。

レコードを製作して踊り子隊、日本舞踊の師匠を各地区、団体に派遣して新舞踊の宣伝に努め、本番を迎えた。

踊り子倍増 山田町組参加 桜井健児さん司会で諸芸大会

よさこい鳴子踊りの参加団体は、料理屋組合連合会（250人）山田町組（30人）など30団、踊り子は1600人と倍増した。

高知公園内の追手門内の特設舞台では、ラジオで人気を博していた「しばてん」こと桜井健児さん＝土佐山田町出身＝の司会による素人飛び入り諸芸大会も開かれ人気を呼んだ。

香美市とよさこい（年表）

◆1957（昭和32）年＝第4回よさこい祭り

警察、街頭パレード規制通告 地方車やバンドが登場

県内外の主な出来事＝戦後2度目のデフレ政策で、神武景気から一転して「なべ底景気」に。

警察の道路交通規制が厳しくなり、繁華街を集団で踊ることを禁止するとの強い通達により、街頭パレードが中止され、審査場、協賛舞台中心の演舞となった。商店街有志らはこれに反発。参加者も逆に31団体、1800人と増えた。

伴奏もレコード主体だったのが特別編成のバンドがお目見え、専門の地方車も登場し、迫力や華やかさが増し、それぞれの踊り子隊のレベルも一気にアップした。

◆1959（昭和34）年＝第6回よさこい祭り

南国土佐を後にしてヒット 龍河洞保存会が弥生神楽

県内外の主な出来事＝不況脱し「岩戸景気」。ペギー葉山さんが歌った「南国土佐を後にして」が全国的ヒット、県内への観光客が倍増した。

踊り子2500人が参加。土佐山田町の龍河洞保存会が弥生神楽を取り入れた古代人を思わせる踊で特別参加。リズムは、よさこい鳴子踊りの生みの親で、「南国土佐をあとにして」を世に出した、作曲家の武政英策さんが手掛け注目を集めた。衣装や踊り、音楽など工夫を凝らした個性的な新作に挑戦する踊り子隊が現れ始めた。

香美市とよさこい（年表）

◆1960（昭和35）年＝第7回よさこい祭り

本部競演場、追手筋へ

本部競演場を、テレビ中継のため、高知市役所前から広い追手筋に移す。

鳴子踊りの型は「自由」とし、県外の踊り子隊の参加も積極的に誘致。このため最多の43団体、3200人が工夫を凝らした演舞を披露、今回から設置された追手筋の棧敷席は大勢の観客でにぎわった。

◆1970（昭和45）年＝第17回よさこい祭り

大阪万博に出演 日本の祭り10選に

大阪でアジア初の「万博」が開催され、「日本の祭10選」によさこい祭りが選ばれ、選抜隊1が演舞を披露した。

鳴子踊り生みの親で作曲家の武政英策さんがこの日のために工夫を凝らしたテンポの速いリズムは、会場を埋めた外国人らを魅了し、海外でもよさこい鳴子踊りが知られるきっかけになった。

17回大会には4000人が参加。土佐山田祭りにも踊り子600人が派遣された。

香美市とよさこい（年表）

◆1971（昭和46）年＝第18回よさこい祭り

振興会は「基本の型」示すが...

鏡川河畔で第1回フェスティバル土佐・鏡川まつりが行われ半世紀ぶりに花台が登場、昔懐かしい祭りの風物詩を再現した。

踊りも歌詞も独自にアレンジするチームが増える中、よさこい祭振興会は、追手筋の本部および中央公園の競演場では、歌詞の入らない曲だけの音楽を使用、振り付けもアレンジなく「基本の型」で行うことを決定。

ところが、踊り子らはこれに従わず、バンドや大太鼓の音もにぎやかに趣向を凝らした踊りで練り歩き、2万人の観客を魅了。これを機に、音楽も踊りもより多様化していくことに。42団体4500人参加。

◆1972（昭和47）年＝第19回よさこい祭り

初の海外ニース・カーニバル出演 繁藤で山崩れ

県内外の主な出来事＝5月、沖縄が「沖縄県」として復帰。7月には土佐山田町繁藤で大規模な山崩れが発生、消防団員ら60人が犠牲となり、土讃線と国道32号線も長期間ストップするという惨事が起きた。

以前、大阪万博に招かれ、よさこい鳴子踊りを目の当たりにしたフランス・ニース市の市長から、よさこい祭振興会に対し「ニース・カーニバルへの参加を」という要請があり、振興会は総勢41人の踊り子らを派遣、初の海外進出を果たした。武政英策さんが編曲したサンバ調のリズムは、海外でも大きな反響を呼んだ。

香美市とよさこい（年表）

派遣隊の中には、当時、県庁職員で、のちに鳴子の制作販売など行うことになる、旧土佐山田町の公文善次郎さん（やまもも工房）もいた。

よさこい祭りは、繁藤の山崩れによる犠牲に弔意を表すため延期し、8月29日から開催。二ノ踊り子隊もフランス国旗にちなんだ青・白・ピンクのトリコロールのそろいの法被で参加、43団体、3500人が演舞を披露した。

◆1989（平成元）年＝第36回よさこい祭り

昭和から平成へ ベルリンの壁が崩壊

県内外の主な出来事＝年明け早々、昭和天皇が崩御、新天皇に皇太子明仁親王が即位。元号は昭和から「平成」となった。4月には消費税がスタート。海外では「ベルリンの壁」が崩壊した。

よさこい祭りの参加団体は、香美地区青年団（70人）など123団体となり、踊り子は最多記録を更新し14000人を突破した。

ロック、ディスコ、ラップ... 振興会は節度ある行動要望

1972年の二ノ踊り子・カーニバルに参加して以降、ドイツ、マルセイユなど海外で開催されるジャパンウィークに毎年のように参加することに。

エレキバンドやブラスバンドの伴奏が急増し、チーム独自のアレンジで大音量の演奏が定番に。曲調もサンバ、ロック、ディスコ、ジャズダンス、ラップ、レゲエ、ユーロビートなど多彩になものへと変化。

香美市とよさこい（年表）

各チームの踊りや音楽、衣装は、その時々在世情を色濃く反映した、自由で開放的なお国柄ならではの、踊り子主導の多彩な祭りへと変貌する中、深夜の大音響で警察が出動することも。

こうしたことを受け、よさこい祭振興会はいくつかのルールを打ち出し、その都度、節度ある行動を要望するようになっていく。

- ①地方車の大きさは4トンまで
- ②1チーム150人以内
- ③競演場以外での音出し禁止
- ④鳴子を必ず持ち前進
- ⑤曲には必ず『よさこい鳴子踊り』を入れる
- ⑥ごみ放置のチームは参加取り消し
- ⑦地方車の音量測定調査実施

香美市とよさこい（年表）

◆1991（平成3）年＝第38回よさこい祭り

バブルが崩壊、湾岸戦争 前日祭開催よさこい新時代へ

県内外の主な出来事＝国内では過熱していた土地投機が破綻、「バブル」が崩壊した。海外では、69年におよぶソ連体制に終止符が打たれる一方、多国籍軍によるイラク空爆が開始され「湾岸戦争」が始まった。

よさこい祭りでは、生みの親である高知商工会議所が創立100周年を迎えたことを記念し、同商工会議所青年部が中心となり8月9日、中央公園で前日祭（のちの前夜祭）を開催した。

前日祭では初代グランプリに輝いたセントラルグループなど20チームが参加。

北海道など全国各地の若者らを魅了し国内外へと広がっていくことになる、エネルギッシュな踊りを披露、この年を機に、高知発祥のよさこいは新たな時代に突入していった。

38回大会には、龍河温泉チーム（100人）など137組16200人が参加。その趣向を凝らした多様な踊り、華麗な衣装、迫力ある音楽は、南国土佐のカーニバルと評されてるようになった。

香美市とよさこい（年表）

◆1992（平成4）年＝第39回よさこい祭り

YOSAKOIソーラン祭り始まる

県内外の主な出来事＝バブル崩壊の影響が急速に広がり、不況色が強まる中、高知県の人口は、全国の都道府県で初めて、死亡数が出生数を上回る「人口自然減」に陥り、以後、過疎高齢化による深刻な状況が続くことになった。

前年の38回大会の前夜祭でグランプリを受賞した、セントラルグループの演舞などに魅せられた、北海道大学の学生、長谷川岳さんらが約120人の学生実行委員会を組織し「第1回YOSAKOIソーラン祭り」を企画。

札幌市の大通り公園をメイン会場に6月13、14の両日開催され、高知から参加したセントラルグループなど10チーム約1000人が演舞を披露した。

本県の北海道事務所や高知県人会なども北大生らの取り組みを全面的に支援。本県出身の東大生、川竹大輔さんらが参画した、高知・北海道両知事らによる討論会なども行われるなど、学生らが北と南をつなぎ、よさこいが全国に広がるきっかけともなった。

土佐山田町 北大生ら受け入れ

YOSAKOIソーラン祭りの鳴子は、県北海道事務所などの依頼を受け、土佐山田町のやまもも工房が「学生たちのためなら」と準備。さらにこの年、裏方に徹していた学生実行委のメンバーらが「今度は、よさこい発祥の地高知で自分たちも踊りたい」と切望、急きよよさこい祭りに参加することに。

香美市とよさこい（年表）

橋渡し役となったのは、県北海道事務所に勤務していた岡林秀典さん（土佐山田町出身）ら。学生らの宿泊には多額の費用が必要となる。同事務所は八方手を尽くしたが、県内の受け入れ先は見つからない。途方に暮れた岡林さんは、いちるの望みを託し出身地の同町に受け入れを打診した。

相談を受けた同町は、学生らの受け入れを了承。町内の若者が中心に組織した地域おこしグループ塾「STEPUP」などが受け皿となり、受け入れ準備を進めた。窓口となったのは、同町役場の企画担当職員だった浜田賢二さん。連日、県北海道事務所との連絡調整などに汗を流した。

香美市とよさこい（年表）

総勢120人の宿泊先確保

学生たちの要望は「雨露さえしのげれば…」ということだったが、よさこい祭りまで2カ月ほど。しかも来高を希望する学生は総勢120人。宿泊場所を確保するのは容易なことではなかったが、同町は最終的に中央公民館などの複数の公共施設を宿泊先として提供することで、全ての学生らを受け入れることにした。

8月初旬、北海道から同町入りした学生らは、同町議会の議場で開かれた、地域活性化のための提言を行う「土佐山田21世紀会議」に参加。

資金のない学生たちのために、同塾の若者らが世話役として奔走、食事の手配などの支援をした。

ソーランの学生 よさこい祭りで演舞

土佐山田町の物心両面の温かい支援を受け、北大生らは第39回大会（138団体16200人参加）に、北海道代表YOSAKOIソーランチームとして念願の出場を果たし、特別賞を受賞した。

同町に宿泊した学生らは、その年の第1回YOSAKOIソーラン祭りに「ヤーレンソーラン積丹町」のメンバーとして参加していた北海道・積丹町の役場職員2人も同行。ソーラン節発祥の地・積丹町と土佐山田町の相互交流へと発展していく発端となった。

香美市とよさこい（年表）

総勢120人の宿泊先確保

学生たちの要望は「雨露さえしのげれば…」ということだったが、よさこい祭りまで2カ月ほど。しかも来高を希望する学生は総勢120人。宿泊場所を確保するのは容易なことではなかったが、同町は最終的に中央公民館などの複数の公共施設を宿泊先として提供することで、全ての学生らを受け入れることにした。

8月初旬、北海道から同町入りした学生らは、同町議会の議場で開かれた、地域活性化のための提言を行う「土佐山田21世紀会議」に参加。

資金のない学生たちのために、同塾の若者らが世話役として奔走、食事の手配などの支援をした。

土佐山田と積丹両町交流へ 「北と南の回り舞台」始動

よさこい祭り後、土佐山田町では、YOSAKOIソーラン祭りに端を発した、北海道の学生たちとの絆を深め、新たな展開へとつなげようという動きが起きていた。

交流の窓口となった同町役場の浜田さんらは、地域おこし関係団体や商工会、農協などにも呼び掛け「北と南の回り舞台」事業を提案。その年の10月には、北海道の余市町・積丹町・札幌市を訪問、官民挙げた交流の第一歩となった。

香美市とよさこい（年表）

◆1993（平成5）年＝第40回よさこい祭り

土佐山田町 ソーラン祭りに参加

6月9日から3日間の日程で「第2回YOSAKOIソーラン祭り」が開かれ、高知からは、セントラルグループのほか、土佐山田町が参加。山田太鼓伝承会などの勇壮な演奏などで道産子を魅了した。

高知では、第40回大会に先駆け、「40周年記念フォーラム」が開かれ、YOSAKOIソーラン祭り実行委員の長谷川岳さんら6人がパネリストとして登壇。本番では山田太鼓など144団体16500人が演舞を披露した。

平山小に雪だるま 積丹町余別小と交流

この年の3月、北海道積丹町の「町に灯りを灯す会」から、土佐山田町の平山小学校の子どもたちにと、二十数個の雪だるまが届く。

6月には、YOSAKOIソーラン祭りに参加するため北海道入りした土佐山田町の一行が積丹町を訪問。併せて、平山小の児童が積丹町の余別小学校を訪ねるなど、両町の子どもたちの交流もスタートした。

8月の「土佐山田まつり」に合わせて北海道から積丹町一行が来町。「北ガス&学生チーム」が演舞を披露した。

香美市とよさこい（年表）

◆1995（平成7）年＝第42回よさこい祭り

阪神淡路大震災 ソーランに土佐山田・積丹合同チーム

県内外の主な出来事＝1月、阪神・淡路大震災。3月には地下鉄サリン事件を起こしたオウム真理教の麻原彰晃代表逮捕。

阪神・淡路大震災の影響から、123団体13300人の参加。踊り納めにと初めて後夜祭が開かれ、地区競演場奨励賞を受賞した山田太鼓を皮切りにエネルギーギッシュな踊りを披露した。

第4回YOSAKOIソーラン祭りには土佐山田町と北海道・積丹町が合同チームを結成して演舞、北海道知事賞を受賞した。

◆1996（平成8）年＝第43回よさこい祭り

平山小と余別小相互訪問 アンパンマンミュージアム開館

県内外の主な出来事＝0-157が猛威を振るう。7月には香北町に「やなせたかし記念館・アンパンマンミュージアム」が開館、人気を集める。

6月、札幌市内で開かれた「第5回YOSAKOIソーラン祭り」でも、土佐山田町と積丹町の合同チームが連続出場。8月のよさこい祭りでも、よさこい節とともに「ヤーレン、ソーラン」のソーラン節が競演、独自アレンジの和風調が復活するなど、YOSAKOIソーランが全国的に広がっていく一方で、よさこいは各地でそのかたちを変え「進化する祭り」へと変貌していった。

43回大会には123団体13500人が参加した。

6月には土佐山田町の平山小学校の児童が、翌7月には北海道積丹町の余別小学校の児童が、それぞれの学校を相互に訪問し交流を深める。

香美市とよさこい（年表）

◆1997（平成9）年＝第44回よさこい祭り

平山・余別2小姉妹校に 刃物まつりで交流

44回大会には126団体14000人が参加。

北海道積丹町から、土佐山田町の平山小学校に毎年、雪だるまが届けられる中、同校は、積丹町の余別小学校と姉妹校の提携を結んだ。

6月のYOSAKOIソーラン祭りとともに8月の土佐山田まつりで、土佐山田町と積丹町の合同チームがそれぞれ演舞を披露。加えて10月、土佐山田町で開催された刃物まつりにも積丹町が初参加。踊りを通じた文化交流は、それぞれの地場産品を出展する経済交流へと発展していった。

◆1998（平成10）年＝第45回よさこい祭り

98高知豪雨 県都が水没

県内外の主な出来事＝9月、高知県中部を記録的な集中豪雨が襲い、国分川が氾濫し各地が冠水。県都高知市は水没し、JR土讃線も3カ月寸断された。

45回大会には123団体14000人参加。仙台市では第1回みちのくYOSAKOIまつりが始まった。

香美市とよさこい（年表）

◆1999（平成11）年＝第46回よさこい祭り

初の全国大会開催 名古屋では「ど真ん中祭り」

46回大会には134団体15000人の踊り子が参加。どこの競演場でどのチームが踊り、待機中か、リアルタイムで配信する「どこいこサービス」が人気。

初めての全国大会を開催し、北海道の平岸天神ソーラン踊り保存会など県外14を含む33チームが競演した。

一方、名古屋では8月、第1回にっぽんど真ん中祭りがスタート。北海道のYOSAKOIソーラン祭りに参加した名古屋学生チームのメンバーが「名古屋にも学生の手で祭りを」と企画。

踊りに使用する曲の中にそれぞれの地元の民謡の一節を入れることなどをルールに掲げ、数年後には参加者が20000人を突破するなど、ど祭りは規模、観客動員数においても、よさこい祭りを上回るものへと急成長した。

◆2001（平成13）年＝第48回よさこい祭り

米同時多発テロ 原宿表参道でスーパーよさこい

県内外の主な出来事＝9月11日、米ニューヨークの世界貿易センタービルとワシントンの国防総省ビルにハイジャックされた旅客機が相次いで激突、犠牲者3000人以上を出す史上最悪のテロ事件となった。

同時多発テロを受け、米英両政府は反米テロの黒幕、ウサマ・ビンラディン容疑者を首謀者と断定、同容疑者のイスラム原理主義テロ組織アルカイダをかくまうアフガニスタンのタリバン政権に対し、空爆を中心とした激しい軍事攻撃を実施した。

8月25、26の両日、東京・原宿の明治神宮内特設ステージなどで原宿表参道元気祭スーパーよさこいが開幕。その後も、北海道のYOSAKOIソーラン祭りに影響を受けた若者たちが、全国各地でよさこい系の祭りやイベントを企画する流れは加速していった。

第48回大会には153団体、17000人が参加した。

香美市とよさこい（年表）

◆2002（平成14）年＝49回よさこい祭り

土佐山田町 積丹町と姉妹都市提携

北海道のYOSAKOIソーラン祭りは11回目となり、相互訪問などで交流を続けてきた、土佐山田町と北海道積丹町が姉妹都市提携を締結。この年の6月、積丹町で締結がなされ、10月には土佐山田町役場で姉妹都市締結調印披露式が行われた。

49回大会には157団体17400人が参加。高知市教委の子どもよさこい支援事業を受け、公立中学校では初めて同市の南海中学校が出場した。

◆2003（平成15）年＝第50回よさこい祭り

電車通りで記念パレード 全国200カ所以上でよさこい

県内外の主な出来事＝3月、米英軍がイラク戦争開始。イラク全土でテロ相次ぐ。新型肺炎（SARS）の感染広がる。

よさこい祭り50回を迎え、様々なイベントが行われた。帯屋町アーケードと電車通りの一部区間（約400m）で半世紀を振り返る記念パレードを実施。

初期踊りの再現から始まったパレードは、子どもたちや地区競演場代表チームと続き、転機となった昭和40年代後半のニースカーニバル参加した頃からの大賞受賞チームが踊りを披露。50年間の移り変わりを表現した。

各競演場では史上最多の187団体20000人が競演した。

香美市とよさこい（年表）

「よさこい」の名がつく祭りは全国に広がり、44都道府県200カ所以上に及び、北海道のYOSAKOIソーラン祭りは発祥地・高知をしのぐ規模に。

9月には、プレよさこい甲子園が高知市内で開かれ、全国の中高生やアフリカ・ガーナなどから24組1100人が参加した。

◆2004（平成16）年＝第51回よさこい祭り

よさこい甲子園開催

県内外の主な出来事＝新潟県中越地方沖を震源とする地震が発生。79年ぶりに鳥インフルエンザ発生。

51回大会には179団体19000人が参加。高知市がよさこい甲子園を開催、18チーム900人の生徒らが競演した。

香美市とよさこい（年表）

◆2005（平成17）年＝第52回よさこい祭り

平山小休校、余別小との交流途絶える

1993（平成5）年以降、北海道積丹町の余別小学校と相互訪問するなど交流を続けてきた、土佐山田町の平山小学校が休校（のちに香長小学校に統合）となり、姉妹校・姉妹町として毎年継続していた、両町挙げての児童交流はいったん途絶えることに。

52回大会には177団体19000人が参加。高知市が財政難から、子どもよさこい支援事業を廃止、よさこい祭りに参加する生徒・学校等への補助金が打ち切られることになった。

◆2006（平成18）年＝第53回よさこい祭り

3町村合併し香美市誕生

県内外の主な出来事＝市町村合併で香美市、香南市、四万十町、黒潮町が誕生し、県内市町村は35に。11月、土佐山田町出身の漫画家・はらたいらさんが死去。テレビの地デジ放送始まる。

香美市は、物部川流域の旧3町村（香美郡香北町・土佐山田町・物部村）が3月、新設合併するかたちで発足、初代市長には門脇槇夫・土佐山田町長が就任、新市制が施行した。

53回大会には187団体、20000人が参加。よさこい祭振興会は、53回大会の経済効果を78億9100万円と発表、1050人相当の雇用創出効果をもたらした一とした。

香美市とよさこい（年表）

◆2011（平成23）年＝第58回よさこい祭り

東日本大震災が発生 被災地に元気を届ける

県内外の主な出来事＝3月11日、宮城県沖を震源とする日本の観測史上最大規模の地震「東日本大震災」が発生。岩手、宮城、福島、茨城、千葉などの各県の沿岸を大津波が襲い、東京電力福島第1原発ではメルトダウンが発生、大気中に大量の放射線セシウムが放出され、近隣町村では避難を余儀なくされた。

東日本大震災の影響は、県内にもさまざまなかたちで広がり、旅行客や宴会などキャンセルが相次いだ。そうした中でよさこい祭振興会は、日本を元気にするために例年通りの運営をすることに。

その一方で、6月には県内有志によるボランティア応援隊が宮城県の避難所などを訪問、がれきの撤去などを行った。高知特産の野菜スープなどを振舞った後、「よさこいで笑顔に」と被災者らに鳴子を手渡し一緒に踊り、元気を届けた。

58回大会1には89団体18000人が参加。踊り子たちに募金を募り、被災地の宮城県の小学生らを招待。高知市の夢産地とさやま開発公社は、原発事故で避難所・仮設住宅での生活を余儀なくされている福島県の踊り子チームを招き、高知市役所チームと一緒に踊ってもらった。

岩手県を除く東北5県の11団体でつくる「とうほくYOSAKOI協議会」に応援フラフを贈ることを決定。市内の衣装製作会社やスタジオの代表らがチャリティーリストバンドを作り各チームに販売。経費を除いた収益を被災地支援に充てた。

香美市・積丹町姉妹都市10周年 災害応援協定も

香美市と北海道積丹町でそれぞれ姉妹都市盟約10周年の記念行事をそれぞれ開催。10月には災害時相互応援協定を締結した。

香美市とよさこい（年表）

◆2013（平成25）年＝第60回よさこい祭り

やなせさん死去 60年で踊り子も変化

県内外の主な出来事＝アンパンマンの生みの親、やなせたかしさんが10月死去。2020年夏季五輪の開催地が東京に決定。

60回を迎え、前夜祭の中で記念パレードが帯屋町アーケードで行われるとともに、第1回よさこい祭りの踊りの再現や「みんなでよさこいプロジェクト」による総踊りの曲（この地へ～）（作詞作曲 GReeeeN・編曲 雑音軒）を披露。よさこいの移り変わりを表現した。

214団体20000人が参加。10年前の50回と比べ、踊り子に占める県内・県外の割合が大きく変化してきていることが明らかに。かつては7人だった県外勢の比率が、60回では4人に1人となり、県内の参加者が減りつつあることが分かった。

◆2015（平成27）年＝第62回よさこい祭り

香美市が積丹町との児童交流再開

県内外の主な出来事＝集団的自衛権の行使を可能にすることや、米軍への後方支援を大幅に拡大することなどを柱とする安全保障関連法が成立。過激派組織「イスラム国」（I S）などによる大規模テロが世界各地で多発した。

8月、香美市児童が北海道積丹町を訪問し交流。土佐山田町の平山小学校が休校となって以来、途絶えていた北と南の子どもたちの相互訪問が十数年ぶりに再開することに。

6月のYOSAKOIソーラン祭りには、香美市と積丹町の合同チームが二十余年にわたり連続出場。

併せて香美市の関係者は、積丹ソーラン味覚祭りにも参加し、香美市で開かれた土佐山田まつり、刃物まつりにはそれぞれ積丹町の関係者らが訪れ、踊りの披露や物産販売で交流を深めた。62回大会には205団体18000人が参加した。

香美市とよさこい（年表）

◆2018（平成30）年＝第65回よさこい祭り

8月10日は「よさこい祭りの日」 東京五輪向け
始動

県内外の主な出来事＝法務省は7月、オウム真理教の元代表松本智津夫（麻原彰晃）元死刑囚と元幹部らの刑を執行。

7月には西日本豪雨、9月には北海道地震が発生するなど各地で災害が相次いだ。

祭りが初めて披露された8月10日を「よさこい祭りの日」として、一般社団法人日本記念日協会に登録。4月には関係者らによる式典が行われた。

2017年春、尾崎正直前知事らの呼び掛けで、2020よさこいで応援プロジェクト実行委員会が発足。その後、名古屋のにつぽんど真ん中祭り、札幌のYOSAKOIソーラン祭り、三重県津市の安濃津よさこいを主催する団体などが加盟、この年には80団体を超える全国的なネットワークがほぼ整った。

名古屋や東京・原宿では五輪の聖火リレーを模し、各祭りをつなぐフラッグリレーがスタート。2020年夏の東京五輪・パラリンピックの開閉会式や文化プロジェクトでよさこいの演舞などを実現するプロジェクトが始動した。

65回大会には206団体18000人が参加。県は、2016年から世界各国でよさこいを普及・発信しているよさこいチームをよさこいアンバサダーと認定。以降、海外から訪れる踊り子隊の演舞が定着した。

ブルーインパルス（航空自衛隊宮城県松島基地第4航空団第11飛行隊）の展示飛行が8月9日の前夜祭に、高知市城西公園を中心に行われ話題となった。

香美市とよさこい（年表）

◆2019（令和元）年＝第66回よさこい祭り

山田高フラフの衣装で前夜祭演舞 原点のよさこい発信

県内外の主な出来事＝平成天皇が4月30日に退位、新たに皇太子徳仁なるひと親王が5月1日第126代天皇に即位。天皇の退位は202年ぶり。新元号となった「令和」は、万葉集から引用された。

消費税率が10月1日、8%から10%に引き上げられた。外食や酒類を除く飲食料品などの税率を8%に据え置く軽減税率制度や、キャッシュレス決済を対象にしたポイント還元制度も同時に導入された。

66回大会には207団体18000人が参加。中央公園で行われた前夜祭では、高知県日本舞踊協会の協力を得て、初回に踊られた「よさこい鳴子踊り」が再現された。歌舞伎役者の尾上右近さんらも飛び入りで参加。六十余年前から継承する日本舞踊の師匠らの三味線や太鼓、生歌に合わせ、前年の入賞チームや次代を担う子どもたちが「原点のよさこい」を楽しんだ。

香美市の県立山田高校の生徒も初参加。地元土佐山田町の伝統工芸品「フラフ」を使って製作した衣装を身にまとい、手には同町のやまもも工房の花鳴子を持ち演舞を披露した。

また前夜祭の総踊りには、お笑いコンビ・南海キャンディーズの山里亮太さんが登場。本番最終日には世界的ダンサーの菅原小春さん（千葉県出身）が「須賀IZANAI連」と即興コラボ、話題を呼んだ。

香美市とよさこい（年表）

大学生が「土佐よさ」初開催

前夜祭に先駆け、県内の大学生でつくる実行委員会が、土佐学生よさこい大会を開催し、県内外10チーム770人の学生らが参加した。大学生が運営する祭りや大会は全国各地で開かれているが、よさこい祭りでは初めての開催となった。

10月、原点から世界への広がり2020に向けて～と題した、よさこい情報交換会が高知県などが主催して東京都内で開かれた。

県日本舞踊協会の若柳由喜満さんらが、土佐のお座敷文化や日本舞踊をルーツとする、よさこい鳴子踊りの生い立ちを説明し、初回の踊りを実演。国内200カ所以上、29の国や地域に広がったよさこい発祥の地の魅力を、国内外のよさこい・メディア関係者らに発信した。

楠目小がよさこいプロジェクト

11月には、香美市の楠目小学校で、第11回四国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会四国大会が開かれた。

同校の3年生は公開授業で、4月から取り組んできた「よっちょれ！よさこいプロジェクト」のひとこまを発表。授業には前夜祭を体験した山田高生の姿も。

児童らは、香美市の良さをアピールするため、来夏のよさこい祭りに参加する目標を掲げ、学びを深めていく。

香美市とよさこい（年表）

◆2020（令和2）年＝第67回よさこい祭り（予定）

新型コロナウイルス猛威 山田高新学科でよさこい探究へ

県内外の主な出来事＝年明け早々、新型コロナウイルスの集団感染が猛威を振るい、日本を含めた世界各国で発生が報告された。小中高校は休校となり、選抜高校野球は中止、大相撲春場所は無観客開催となるなど衝撃が広がる。

1月、北海道積丹町の小学生児ら香美市を訪れ、同市の片地小学校の児童らと交流。

香美市の県立山田高校が新年度からグローバル探究科とビジネス探究科を新設、ビジネス探究科では「よさこいプロジェクト」を推進することに。

主な参考・引用文献

よさこい祭振興会『よさこい祭り20年史』

よさこい祭振興会『よさこい祭り40年』

よさこい祭振興会『よさこい祭り50年』

よさこい祭振興会『よさこい祭り60年』

南国土佐・高知「よさこい祭り」公式WEBサイト

北川泰斗『街は舞台だ YOSAKOIソーラン祭り』高知新聞社

坪井善明・長谷川岳『YOSAKOIソーラン祭り 街づくりNPOの経営学』岩波書店

武政英策『歌ありてこそ』

内田忠賢編『よさこい/YOSAKOI学リーディングス』開成出版

岩井正浩『これが高知のよさこいだ！いごっそとハチキンたちの熱い夏』岩田書院

矢島妙子『「よさこい系」祭りの都市民俗学』岩田書院

岡崎直温『よさこいはよさこいじゃきに』イープレス出版

川竹大輔『よさこいはなぜ全国に広がったのか』リーブル出版

『よさこいの「かたち」高知65年目の夏』高知新聞社連載記事

主な参考・引用文献

濱田賢二『北と南の回り舞台 熱き人そして心あり～YOSAKOIソーラン祭りと積丹町との交流の軌跡～』

高知市『地方都市のくらしと幸せ 高知市史民俗編』

土佐山田町教育委員会『土佐山田町史』

香美市教育委員会『姉妹都市（積丹町）交流事業』

第11回四国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会研究大会 第26回土佐教育研究会生活科・総合的な学習部会研究大会—高知大会—『大会主題 新たな時代を切り拓く子ども～ふるさとの未来を創造する～ 香美市立楠目小学校 第3学年 総合的な学習の時間 学習指導案』

高知県立山田高等学校令和2年度学校案内「ヤマコウ」

高知県立山田高等学校商業科 繋ぐ未来～高知の未来を担うのは私たち～

高知県立山田高等学校課題探究 探究リテラシー年間指導計画